
10名の介入者内1人主人公

ノイベルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10名の介入者内1人主人公

【Nコード】

N3786W

【作者名】

ノイベルト

【あらすじ】

10人の介入者がネギまの世界に行く話です。主人公はこのうちの一人です。一応最強者です。これは、以前自分が投稿していたものの書き直しです。それでもよければどうぞ。

第1話 プロローグ（前書き）

書き直したものです。プロローグはほとんど変わっていませんが
要所、要所変わっている部分があります。

見苦しい点もあるとは思いますが楽しんでいただけると幸いです。

第1話 プロローグ

死——それは様々な柵から確実に解放される方法である。

「はずなのにこれは何だ？」

周囲を見渡すと異常に広いのを除けば自分知っている銀行の窓口のような場所だった。

「しかも、整理番号って」

死んでしまい。目覚めたと思ったら行列に並ばされて、手に入れたのは28541と書かれた整理番号ただひとつ。目の前ではスーツ姿の受付嬢が事務作業のように人を捌いている。

死後もこんな世界なのかと若干の絶望感を感じつつボーと呆けていると番号を呼ばれた。398番と書かれた窓口に行き、整理番号の紙を渡す。すぐさま該当するであろう資料を確認し、俺に指示を出した。まさに神業、この間なんと5秒程度……さすが死後の世界、生前の世界の公務員にこの速度を見せてやりたい。

「ええと、あんたは1番窓口に行つて、そこに特別課って書かれた腕章している人がいるから」

「はあ、分かりました」

ふむ、1番窓口はいいのだが、ここから目測でも1キロぐらいあるんじゃないかなあれ。

溜息一つつき、グダグダ言っても仕方ないので俺は歩き出した。周りを確認しながら歩いていると新たな発見が――ない。

「変わらねえ」

まったく同じ構造の窓口が延々と続く。唯一変わるのは、並んでいる人の種類だけ。

国際化が進んだこのご時勢、外国人なんて得に珍しくもなく興味はそそられない。

十数分ほど歩き続けると、目的に到着した。

「あなたで最後ですね。こちらにどうぞ」

「どうも」

まったく飾り気ない鉄製であろう無骨なドアをくぐると、学校の教室程度の広さのコンクリート部屋であり、入った瞬間その場にいた人間の視線が一瞬集まった。

若干、驚きつつも軽く会釈をして、壁に寄りかかり、その場にいる人間を軽く見渡した。自分より幾分か幼い中学生？　ぐらいの病的にはっそりとした少年、日本人にしては大きい自分と同じ程度の身長をした白衣を着た男性。そして、唯一小声で話しているオタクファッションのデブと先ほどの少年とは違いおそらく偏食による痩せ方をした男の計4名の人間がこの場にいた。

ふと、改めて今の自分の姿を確認すると、ジーンパンにTシャツ、中肉長背。うん、最後の2人には身体的特徴を指摘できるぐらいに

は、俺の体型はまともだな。そう思いつつ、他に物が無いのか周りをぐると確認すると自分が入った以外に5つの扉があった。

「では、ご説明します」

俺は、思考中断し、腕章をしている女の人に注目する。しかし、オタクファッションの2人は急な展開にざわつく。おいおい、自分たちより幼い少年でさえ状況把握しようとしているのにいい年した大人がざわつくなよ。

「ま、まってくれよお。何で僕たちが呼ばれたんだよお」

デブは怯えた感じの声を上げた。

おい、デブ、大丈夫か？　ただしゃべっているだけなのに呼吸が荒いぞ。

「質問等は、説明が終わり次第可能な限り受け付けます」

ばっさりだね。しかも可能な限りとは、どこぞの政治家かい。淡々とした口調にビビったのか、不満そうな表情をしつつも静かになる2人。

「では、あなたたちは、とある世界に送られる人間に選ばれました。選考方法はランダムです。拒否権はありません。送られるに際して、可能な限り要望をお聞きます。では、（私の）時間が（もったい）ないので好きなドアをお選びください」

腕章の女の人がい終わると同時に、騒ぎ出す2人。

「も、もしかして転生フラグ来たんじゃないね！」

「ぼ、僕達選ばし者お」

「そうだよな、これはハーレム狙うしかないじゃん」

「よ、要望聞くてことはち、チート能力ゲットお」

いやいやいや、転生って北〇の拳みたいな世界ならどうするつもりなんだ？ 特別じゃない選考方法はランダムだ。ハーレムって俺もそうだが生前の人生を思い出せ！ 言われた事をよく思い出せ可能な限りと言っているんだぞどんな制約あるか不明じゃねえか。と言うか気づこうよこれぐらい。

もういやだ。さっさと行こう。そう思い、いち早く俺は一番近くにあったドアをくぐった。

くぐった先はさっきの空間より狭く、机と椅子以外のものがない空間だった。そこに一人無駄に自己主張している赤いスーツを着た男がいた。その男は対面に座るように俺を促した。赤いスーツとはもしかこの人は戯〇のファンなのか？

「で、君の要望はなんだい？」

俺が座る同時に面倒くさそうに対面に座っている男は、端麗な顔立ちを台無しにするような死んだ魚のような目をこちらに向け、天然パーマの茶髪を弄りながら声をかけてきた。というか目の前に来ると蛍光灯の光を異常に反射している赤いスーツが目にも痛い。

「はあ、要望ではありませんがとりあえず、正直現実で赤のスーツはな——」

俺の声を遮る様に目の前の机が轟音を立てて破碎された。

うん、割れたんじゃないよ。破碎の文字通り粉々になった。場違いにも二重の極みを思い出したよ俺。

「……僕だってなあ、普通に紺色とか黒色とかがよかったよ。けどな、くじ引きで決定したんだから仕方ないだろ！」

いや、そんな握りこぶし作りながら本気で力説されても困るのだが、とうかなぜにくじ引きなんだ？

「というより、いやなら上着を脱げばいいのではないですか？」

俺が言い終わると同時に上着脱ぎ背凭れに掛け、先ほどより真剣な様子で男はこちらを向きなおした。

「――さて、君の要望はなんだい？」

ああ、先ほどまでのやり取りはなかったことにしたいのか。うん、大丈夫だ俺は空気を読める男だ。

「要望の前に質問しても言いですか？　嘘を決して言わないという約束の下ですけど」

「かまわないよ、後敬語は必要ないよ」

先ほどまでとは打って変わり少し嬉しそうな表情を浮かべる男。

「じゃあ、遠慮せずに。まず選考方法はランダムっていったが。どうして全員日本人なんだ？　ありえないことはないがものすごく

低い確率だぞ」

世界の人口と日本の人口の比率は約60…1、一人なら分かるがランダムで5人全員日本人ってぶっちゃけありえない。

「はは、単純な話前提条件が違うだけだよ。まず、とある世界にいるのはネギまを模した世界だ。だから、日本人であり、ネギまの読者であり、転生やトリップという概念を受け入れやすい年代そして、ここ最近死んだという条件があったんだよ」

へえ、ネギまねえ。確かにマガジンで立ち読みしていたが、いやらしい世界を選ぶなあ。

「じゃあ、次、可能な限りの要望を聞きますの可能な限りの制約は？」

「魂の器の大きさに収まる範囲だよ」

「収まる範囲？ 具体的にいえないのか？」

まあ、魂ってものの概念はなんとはなしに分かるが、実際問題収まる範囲ってどの程度だよ。

「うーん、君の行くこれから行く原作開始時での世界での金銭的価値に置き換えれば普通の人間が約3億円、君の場合はおお、よかつたじゃない平均より高い4億1000万円だよ」

うわ、一気に分かりやすくなった。要するにその価値分的能力をもらえるってことか、才能の取捨選択だな。

「でも、才能や時間、特定の人物に対する好感度の単価は？」

「才能は、天才と呼べるだけのものになると物によるが10億程度だよ。時間は、原作開始時点を基準として100年単位で1000万 原作キャラの好感度はお勧めしないよ少しあげるだけでも億単位でかかる」

「何で時間が100年単位なんだ？」

「君の世界の生命体の寿命が終わるからだよ。1年単位にして原作のキャラクターに刷り込みみたいのな事されるとおもしろくないしね」

「後、能力じゃなくてアイテムの類はいけるのか？」

「まあ、その世界の価値で魂の器以内のものならね」

そうか、後は値段しだいということか、これで大体は把握した。さてと、ここで俺には大前提として2つの選択肢が出てくる原作にかかわるか否かだ。関わらないのなら日常生活で役立つ能力を手に入れ、努力しだいで前世よりほぼ確実にいい生活ができるだろう。原作に関わるなら戦闘があることを見越して能力を考えなければならぬ。とりあえず、いくつか気になることを質問してからだな。

「まず第一に、本の価値はどうなるんだ？」

「本かい？」

「そう、本だ。紙とインクの値段のみなのか、それとも載っている情報の価値も含むのかを知りたい」

「あゝ、なるほどねえ……ちよとまってね——うん、ははは、知識をくれというやつはいたけど本とはねなるほど、そういう抜け道もあるんだね」

俺が考えたのは単純だ。本を構成している紙やインク自体はかなり安い。それに載っている情報の価値が高いだけだ。しかし、情報の価値は読む人間によって変動する。高校生の参考書を幼稚園児に渡したところでそれに載っている情報の価値はないに等しい。もっと極論で言えば生前の世界でどれだけ素晴らしい魔道書があったとしても、価値はせいぜい骨董品という部分だけだ。なので、知識自体だと情報量あたりの単価がありそうだが、本自体ならもしかしたらと思い聞いてみた。

まあ、関わる、関わらないのどちらにせよあったほうがいいものだしな。

「結論をいうと、紙とインクの価値だけでいいとさ。どれだけの本を望むんだい？」

「原作開始時の年までに書かれた本と生前の世界の死んだ年までに書かれた本のすべて」

「はいはい。未来のものが無いからその量だと……2億ちょいだよ」

「思ったより安いな」

もちろん、億という単位の金は馬鹿みたいな額だが、生前に一冊数千円する学術書を買っていた身からするとあまりの安さに驚いてしまった。

……うん、いろいろ考えているうちに、ひとつの可能性があると気づいてしまった。あの4人のうち誰かが自分以外の介入者は全員殺すみたいな物騒なことを考える可能性を忘れていた。ちくしよう、絶対に戦闘力、いや、最低限の逃走力が必要じゃないか。

「まあ、元々紙なんてもん自体の価値はものすごく安いからね。向こうには魔法があるしね」

そんな解説を聞きながらも、いろいろと対策を考えていく、魂の全部を足の速さにつき込む？ 防御力を上げてもらう？ いや、相手が自分以上の価値を持っていて、戦闘能力に振られていたらつんでしまう。あ、そうだ。

「……別荘ってどれくらいの値段になるんだ？」

そうだよ、ネギまで登場する公式チートアイテム別荘。これと先ほどの本を組み合わせれば！ どうかなるかもしれない。

「1時間を24時間なら6000万だよ。ここから24時間上げるたびに＋1000万だね」

思ったよりも安い！ これで、時間をかければ十分な戦闘力、ないしは最低限の逃走力を身につけることができる。

「なら、1億で1時間で5日の別荘がいいな、あ、後本の類をその別荘に収納して検索デバイスみたいなのがほしい」

「うん、それぐらいなら、1億の中に入れておくよ」

「さて、残り1億だけど何に使うんだい？」

先ほど考えがまとまった俺は迷わず言った。

「全額時間にしてくれ」

俺がそういうと男はきょとんとした顔になり。確認するような声色で話しかけてきた。

「容姿とか年齢とかはいいのかい？」

「はあ？ 別にかまわないけど、どうしてそんなことを聞くんだ？」

今までにない表情と声色に少し緊張していた俺は、思わず脱力してしまった。

「ふははは、面白いな君は、何度もやってきたけど初めてだよ僕の担当で外見にも能力に関して何も要望してこなかったのは」

「へ？、いや、確かに貴方みたいにイケメンじゃないけど、特別に不細工でもないしなあ。というより、外見がよくなって彼女出来ても虚しくなるだけじゃないか？」

というか笑いすぎです。はじめの死んだ魚の目はどうなった。それに、命の危険に比べたら些細なことです。

「ご、ごほ。そ、そうか。いやはや。こんなに笑ったのは久々だよ。どうするもう行くかい？」

「ああ、じゃあ、最後に質問を。なんのためにこんなことしているんだ？」

「とっても単純明快な理由さ。世界を管理している知的生命体の暇つぶし兼人材発掘だよ」

男は質問に答えながら、腕を振るった。すると人間一人が通れそうな裂け目できた。

「そうか、ならいいや。これに入ればいいのか？」

「そうだよ。では、さようなら」

暇つぶしなら最高だ。この人たちからの介入は、おそろくないだろうから自分の意思で好きなように生きれる。そう思いいきなり現れた裂け目に入ってしまった。

その場に残っていた赤いスーツの青年は、主人公が裂け目に入っていくのを見届ける。本当、久々に面白い子だったなあ、などと考えていた。

「彼なら、いつか自分と同じ場所にくるかもね。でも詰めが甘いよ嘘はついてなくとも言い忘れが無いかを確認しないとね」

髪の毛をいじりながら青年は席を立ち新しい裂け目を作りくぐろうとした。そのとき彼は重大なミスに気がついたようだ。

「あ、名前決めてない」

彼は頭を抱えながらどうしようと思んだ。これじゃあ、戸籍が作れ——というかないじゃん西暦1000年前後の日本に飛ばしたのだからとすぐに問題がないことに気がついた。

「ふむ、このミスは黙っておこう」

ならばさつさと、名前のことと、送った場所についてのメモでも書いて送っておくか。うん、あと少しサービスしておこうと考え裂け目の中に入ってしまった。

第1話 プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第2話 不老になるまでと修行内容（前書き）

この話は一応どういう過程で不老になったのかという内容と一応どんな修行をしたかという内容です。興味の無い方は読み飛ばしていただいてもいいと思います。

勿論呼んでいただけた方がうれしいです（笑）。

第2話 不老になるまでと修行内容

裂け目をくぐり抜けると、そこは森だった。別に木々に囲まれるのはいいのだが、さっきからべしべしと顔に当たってくる黒い虫がうっというこの上ない。

「しかし、なぜに森なんだ？」

まあ、そんなことを疑問に思っても仕方がないので少しでも情報を得るために落ち着いて周囲を見渡すと別荘と思わしきオブジェが一つあった。それに近づき確認のため手を触れるといきなり転送された。

「お、おお！ これはすごい」

初めての魔法に触れたこともあり俺はすごく興奮した。いや、本当にまさかこんな不思議体験をするとはな。

転送された先は草原に畑、牧場などがあり、そのはるかおくには山々が見えた。今更ながら畑を見て気づいたんだが、確かに食料どうするか考えてなかったな。

生きることに必要な衣食住の大事な食を忘れるとは、やはり冷静に考えているようで混乱していたんだな。はあ、と自嘲の溜息を一つつきポケットに手を入れるとクシャツという音が聞こえた。

「なになに、『無事に着いたようだね。一つ言い忘れていたけど名前について、戸籍を作るために確認しているけどその時代明確な戸籍という概念がないから、好きに名乗っていいよ。後その畑や牧場

は少しばかりのサービスだよ。後場所は富士の樹海だから人目は気にしないでいいよ。』ふーん、これは思わぬ幸運だな」

まあ、戸籍つくるとしたら戦後処理に追われている第二次世界大戦後かな？ 名前のほうは生前と一緒の東堂幸弘（とうどうゆきひろ）一でいいだろう。生前の名前のほうが呼ばれなれているし、新しい名前考えるのが面倒くさいというのものもある。

「さて、とりあえずは不老になることから始めるか」

とりあえずそれになれなければどうしようもない。才能は普通、スペックも普通な人間が才能あふれる相手と戦闘になっても死なないためには相手の何倍もの時間を掛けて修行するという選択肢しかない。この世界に介入する人間が俺一人なら、平穩無事に命の危険なんて考えずに生きるっていう選択肢もあつたのにな。せつかく2度目の生を手に入れたんだ寿命や病気ならまだしも殺されてたまるか。

ちなみに、不老になる方法は科学のみでも魔法のみでも実現がとつともなく困難であることは予測がついている。そりゃそうだ、簡単になれるならこのようは不老者であふれかえっている。

ここで、望んだ本が役に立つ。過去に不老になる研究なら多くの権力者や才能ある人間がしていただろう。その研究成果を使わせてもらう。まあ、内容を理解するためにはかなりの時間を使うだろうが、おおよそ残された寿命考えれば50年。これだけあれば大丈夫だろうとは予想している。まあ、だめだったとしても、この別荘の中で平和に何の不便もなく暮らして死ぬるんだ。それはそれでいいだろう。

こうして、俺の不老になる実験は開始した……あれから45年、結論から言えば不老にはなれた。

まず、はじめに魔法の取得、そして魔法薬に関する知識。生物の遺伝工学に対する科学的な知識、これらのものを手に入れた。そして、アプローチ方法としては細胞分裂回数限界の無尽蔵の底上げ、および脳細胞の再生だ。

前者のほうはテロメアというDNAを伸ばし、分裂の停止を起こさせないという方法だ。科学的には伸ばすことは正直俺にはたかだか50年程度では不可能だったがここで、魔法薬や治癒魔法が活躍した。普通の薬と違い、魔力を用いて細胞に直接作用するという原理から、テロメアの構成成分を摂取するたびに元の長さまで再生するという魔法を自身の体に書き込むという手法により肉体の老化がおさまり細胞が活性化して全盛期の状態が維持されるようになった。まあ、原理は簡単にみえるが正直あれだけの本と、他の人間がした研究結果がなければ必要な魔法と科学の二つの知識を効率よく入手することはできず、これをなすのは不可能といっても過言じゃない。

問題は後者だった。脳細胞は繊細かつ、科学でも魔法でもいまだ解明されていない存在だった。おかげで、肉体は若いが徐々に記憶力が落ちていき老化の怖さを体験した。で、最終的にたどり着いたのは万能細胞だ。万能細胞は簡単に言うところの細胞にもなれるという全能性をもっている。あれ？　じゃあこれをつかえば臓器移植とかしなくてもよくね？　と思うだろうが問題はこれは初期の受精卵から出しか取れないということだ……そう、俺の両親のいないこの世界では入手が不可能なんだ。

なので、万能細胞に近い性質を持っている骨髄から万能細胞を生成する方法を考えた。科学的に厳しい壁は魔法がカバーし、魔法的

に厳しい壁は科学がカバーした。おかげで、なんとかボケる前に必要数が完成し、それを脳に打ち込んだ。

問題点とすれば、しっかりと食事を取らなければならないのと定期的に万能細胞を打ち込まないといけないことぐらいである。

まあ、とりあえず、寿命を気にする必要はなくなったので肉体を鍛えることをはじめようと思う。

修行を始めて外部時間で約900年、別荘内で11万4000年の時が過ぎた。

はじめは、何事も体力が基本なので、ランニングからはじめた。後は、武術の本はたくさんあったので姿勢や無駄のない筋肉の鍛え方、殴り方や、よけ方などの基本動作の部分を参考にした。技の部分を参考にしなかったのは、基本もできていないうちに下手に練習して変な癖をつけないためだ。注意してくれる人間はいないしな。

もちろんこれだけでは意味がないので、魔法や気などの不思議エネルギーについても収束、放出、維持などの制御の基本技能および魔力や気の絶対量の増加、および術式の学習。痛みや毒への耐性をつけるため、耐えるかぎり自分を苛め続けた。基本スペックさえ上げておけば相手の使う技の仕組みがわかれば対応策を生み出すこともできるからな。

怖いのは幻術や催眠術の類だ。あれは究極的に言えば誤認識だ。これの対策は体を鍛えているだけでは無理だ。魔法抵抗力でレジストするか、それ専用の術式による防御が必要となるし、世界を誤認させる空間系はさらに対策が面倒となる。しかし、幸い時間はたっぷりであったので知りうる限りの術式に対してそれを破る術式を体

に書き込んでいった。

そして、最後に、実践だ。自分の実力にあったあらゆる種類の人外を呼び、それと殺し合いをした。どれだけのスペックを誇ろうとも、実践で使えなければ意味が無いからな。しかし、ここで問題になったのが、殺し合いをするという恐怖心をどうすることもできなかった。自分自身に催眠をかけ、修行や実践をこなせるようにした。

まあ、はじめは魔力量以外はがんが伸びていき楽しくやっていったのだが1000年ほど経過してから肉体のスペックがまったく上がらなくなった。いや、まあ、当たり前といえば当たり前のことなのだが、簡単な話、構成上の限界が来たのだ。これは関節とか筋肉とかではなく、もっと根本的な人間を構成している分子構造上の限界が来てしまったのだ。

この後はかなりつらかった。正直、催眠による気力の底上げや、精神安定が無ければ、何年、何十年、つづけても一切伸びない状況にくじけていただろう。それからまた同じだけの時が過ぎたころ変化が現れた。また、スペックがあがっていったのだ。俺は歓喜しながらも自分の体のサンプルをとり、様々な視点から考察した。

結論を言うと人間じゃなくなってしまった。いや、見た目とか触った感触とかは人間なんだよ？ だけど、構造がまったく人間とは別物となってしまった。少しばかりショックは受けたが、進化したと考えればいいかと思ひ。気にしないことにした。というか、そうとでも考えないと鬱になる可能性があった。

それから幾度となく、停滞とブレイクスルーを繰り返し、段階的にスペックを上げていった。正直、途中から死を回避するという初

期の目的よりもどこまで進化できるのかという探究心のほうが大きくなってきていた。

これが俺の11万4000年の生活だ……いや、今更ながら魔法による精神安定があってもここまで人と会わないでよく俺発狂しなかったな。確かに食べるための家畜や野生の動物はいるし、いくつかの魔法に必要なだった悪魔を呼び、会話をしたけどさあ。

まあ、はじめに決めてたように、終戦後の今なら簡単に戸籍を手に入れることができるだろう……あゝ、マジで原作どうしよう。なんか、もう、十分魔法などのファンタジーは感じれたし、平穩に生きようかなあ。そんなことを考えながら外に出る準備を始めた。

第2話 不老になるまでと修行内容（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第3話 住処と初邂逅（前書き）

原作キャラが出ます。かなりの勝手な解釈が入っているのでそういうものが嫌いな人は見ない方がよろしいかもしれません。

第3話 住处と初邂逅

京都で薬屋はじめました。とりあえず、あれから無事に戸籍は取れた。自分は生前と同じ名前と20歳という年齢で戸籍をゲットした。

それから15年経ち、現在は巷でよく効く薬屋として有名になってきた。外見は幻術を自分にかけてごまかし、順風満帆にすごしている。そのはずなんだ……そんな俺の目の前には、なぜか着物をしっかりと着こなした男が土下座をしている。

「はあ、用件があるなら聞く。顔を上げてくれ」

俺がそういうとすぐさま端正な顔を挙げ、男は真剣な表情をして言葉を発した。

「ありがとうございます。名前は、近衛近右衛門と申します。このたびは妻の病を治してもらいたくお願いに来ました」

うそ、だろ……このイケメンがぬらりひょんになるのか！ ありえん、人前でなければ大声で叫んでいただろう。

「で、病というのは？」

「……呪術関係です。子を産めば、死に至るというものです。妻は、たとえ命が尽きようとも生むといっております。どうか、どうか助けていただきたい」

「ちょっと待ってくれ。俺は薬屋だ。解呪は専門じゃないぞ」

「あなたが、神鳴流に薬を卸しており、その薬は怪の呪術的な毒をも解毒する事を友から聞きました。お金ならいくらでも用意します！
妻を助けてください」

確かに、その程度呪いの解呪など、今の俺なら手間にすらないら
いだろう。しかし、薬だけでなく呪術にも精通と知れ渡れば、関西
呪術協会が本格的に俺を取り込もうとするだろう。まあ、そんなこ
とがあっても力でねじ伏せることは簡単にできるが。

しかしだ、穏便に済むならそれに越したことはない。そのために
武力の中枢の立場である神鳴流にしか薬を卸さず、軽い口止めして
もらっているのだから。けれど、こいつは将来大物となる。やはり、
ここは、恩を売っておくのが得策か。

「……分かった。ちょっと待っていてくれ」

すぐさま、薬置きから体力や気力を回復する薬と、引き出しから
気をこめた解呪の札を持ってきた。

「この札で解呪してから、この薬を飲ますんだ」

「は、はい。ありがとうございます！」

「お代は3000円だ」

「え？ たったそれだけでよろしいんですか？」

現代人からしたら普通に感じるだろうが、現在の物価を考えると
庶民にとっては薬ひとつにこの値段はかなり高い。まあ、これは気

を回復させる裏専用だから相場はもつと高いがな。

「俺のところの適正な値段だ。解呪の札はあなたの熱意が対価でいいよ」

「っ！ あ、ありがとうございます」

近右衛門は、唇をかみ締め、涙をこらえるように深々と頭を下げた。やばい、ここまで感動されると罪悪感が半端ない。だって、この程度薬や札なんて別荘内のものを使えばほぼただ同然なのだ。

うん、損得以外でも人と付き合おう。そうしよう。

「頭を上げてくれ、さっさと嫁さんを治してやりな」

「はい！」

そういつて近右衛門は元気よくさっていった。

うん、今度来たときサービスしよう。じゃないと、罪悪感で死ぬる。

第3話 住処と初邂逅（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

後1話投稿します。

第4話 不老者と不死者の邂逅（前書き）

原作の無いようだといつまでいたか分からなかったので、都合のいいように解釈させていただきました。原作キャラ2人目です。どうぞよろしくお願いします。

第4話 不老者と不死者の邂逅

あれから数年経ち、近右衛門と話す内に、ああ、この知識は要らないわと思ひ。原作介入はすっぱり忘れることにし、原作があるということ以外その内容を完全に記憶から消去した。そして、このまま他の介入者からのアプローチがないならばこのまま平穩に過ごしていこうと結論を出した。なのにどうしてこうなった。そういえば誰か言ってたな現実はこのままはずじゃなかったということばかりだと。

「店主、痛み止めの薬をくれ」

目の前には、金髪碧眼の洋物の幼女がおり、無い胸を張って偉そうに要求を突きつけてきた。そう、この魔力量、容姿、闇の福音と有名な真祖の吸血鬼エヴァンジェリン。

うん、別に危険は無いな。俺は、自身の今まで積み重ねてきた人外との戦闘経験から、エヴァンジェリンとの戦闘が自身にとって脅威ではないことがわかった。

それにしても、薬屋なので注文する品は間違っていないが、真祖の吸血鬼と恐れられている存在がまさか人間のために薬を買いに来るとはな。などと驚きつつも、正体に気づかない振りをして薬棚からいくつかの商品を出した。

「お客さん、痛み止めといっても様々な種類がある。病気か？ 毒か？ 怪我か？」

「……病気だ。末期のがんだ」

「はいよ。ならこれだ」

末期の癌か、それならばかなりの激痛だろう。今の日本には諸外国と比べて薬の性能は低く、単価は高いからな。苦しんでいるのだろう。

にしても、こういう依頼を聞きたびに思う俺はつくづく最低だと、夜の時間は別荘に入って研磨と研究を続けている俺にとって現在確認されている病気で完治できない病気や怪我は無いといっても過言じゃない。だけどそれをしてしまったら、どれだけ口止めしても段々とその事実が広まり不老である俺は最終的に全人類を助けなければならぬようになるだろう。そんな人生がいやだから助けられる人間でも赤の他人なら見捨てる。

そんな俺の考えを遮るように、エヴァンジェリンは、声をかけた。
きた。

「おい、店主、なぜ私の正体を問わない？ 店主にかかっている高度な幻術を見れば裏の関係者ということは分かっている」

これは驚いた。今までこの幻術ばれたこと無かったのに、気づかれるとわ。いや、あれから仲良くなった近衛夫婦は知っているが、それは俺が教えてたからだ。さすが、最強の魔法使いといわれるだけのことはある。

にしても、正体を問わない理由か。正直に言えばあんまり関わりあいたくないから、俺は肉体はともかく考え方については、普通の人のつもりなので、付き合いがあれば情も沸くし、できる範囲で助けてやりたいとも思ってしまう。簡単に知人や友人を切り捨てれる

ほど残酷にもなれないしな。だから、厄介な背景を持つ存在には初めから関わらないのが俺の平穩を守るベストな方法なのだ。

とりあえず、正体を明かさない限り警戒心を解いてくれることは無いだろうと思ひ。すぐさま、人払いの結界を張り、幻術を解いた。

「はあ、さすが真祖の吸血鬼、最強の魔法使いと名高い存在だな。見破られたのは初めてだ」

「ふん、私をなめるなといったところだが、他の魔法使い共とは一線を画したすばらしい腕前だ。私でさえ若干の違和感しか感じなかった」

「これは光榮だな。で、何で正体を問わないかといったらな。正直どうでもいいんだ」

「……どういふことだ？」

エヴァンジェリンは俺の言葉に対していぶかしげな表情を浮かべた。ちなみに、魔法の腕をほめられて若干うれしかったのは内緒だ。

「俺の薬は一部を除いて過剰摂取による副作用はほとんど無い。だから毒に使われる心配もないし、その程度の薬なら解析されても痛くもかゆくも無い。だから、代金さえ払ってくればぶっちゃ俺のデメリットは一切無いといってもいいんだ、それにその話が本当なら、一人の病人が楽になるんだから、売らない理由は無い」

「ふふふ、ははは、これほどの薬をその程度か。私の正体を知りながら、怯えを見せず、殺意を向けるわけでもないか。店主、知っていると思うが、私の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェ

ルだ。長いからエヴァでかまわん」

「……俺の名前は、東堂幸弘だ。幸弘でいい」

俺は心の中で大きくため息をついた。あゝ、くそう、関わっちまったよ。この感じからすると何回も会いにきそうだなあ。そりゃあね、俺も男だから、幼女といってもこれだけかわいい子が来てくれるならうれしいよ。だけどね、そのこが超特大の爆弾を持っているとしたらどうよ？ まあ、終わったことをともかく言っても仕方ないか。

「それではまた会おう、ユキヒロ」

「はいはい、またな」

予想を確信にしそうな言葉を残し、エヴァはこの場を去っていった。

私は、薬屋を出て始めて自分が緊張していたことに気がついた。

「くくく、私が緊張する、か」

正直に言おう、はじめに戸を潜り、ユキヒロを見た瞬間、見惚れた。

あれ程までに精錬された肉体、究極的に安定した姿勢、一切の淀みのない気と魔力。初めて思ったよ。勝てないと。あれほど有名な薬師がなぜ関西呪術協会に属していないか疑問に思っていたがよく分かった。自身が強者であればるほどその差を実感してしまう。

「……それにしても、奴も私と同類か」

あれだけの力は、才能と努力では到底たどり着けない極地だ。私と同じ、いや、それ以上の年月をかけて鍛え上げたのであろう。その事実が何より嬉しい。やつはこちらに嫌悪感を抱いていなかった。あれほどの存在だ。私より先に死ぬことは無いだろう。友となれば、見送ることしかできぬこの孤独感を減らすこともできるだろう。

「ふふふ、ははは」

私は久々に裏の無い笑みを浮かべた。

第4話 不老者と不死者の邂逅（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第5話 日常と疑問

あれからさらに数年の時間が過ぎた。ははは、予想どおり、いや予想以上にいりびったくれやがりましたよ……この洋ロリが。

「ユキヒロ、飯はまだか」

「ケケケ、オレハ切り合イヲ所望スルゼ」

エヴァは店の奥にある生活空間である居間で本を読みながらゴロゴロとしており、チャチャゼロは、刀剣を研いでいる。

ちくしょう、人の漫画を読み漁りやがって、しまいには叩き出すぞ。

「普通に魚になるけど良いんだな？」

「なんでもいいぞ」

「御主人モスツカリ腑抜ケチマッタナ」

ここまででいたる過程はさして特別なことは無く、あれから幾度と無く訪ねてき、さすがに理由無く追い返すわけもいかず、益体も無いことをだべったり、葉について説明したり、飯を食わしやりしているうちに。来る頻度がどんどん増え、今や俺のうちに住んでいるといっても過言で無いほどになったというわけだ。

はあ、マジで予想していた感じになったなあ。これで、エヴァを退治しに見知らぬ人が着たら間違いないく守っちゃうだろうな。まあ、

勝てそうに無い場合は逃走になるがな。

それにしても、特に魔力封印とかしているわけでもないのに、エヴァの討伐しようとする人間がいないのが不思議だな。まあ、関西呪術協会としては、鬼とかを使役するから吸血鬼もスルーなのかも知れないのかも。などと、将来の不安要素を考えながら飯の準備をしていると少年の元気な声が玄関先に響いた。ふむ、もう一人前追加するか。

「失礼します！ あー！ またいるな吸血鬼め、今日こそ成敗してくれる『斬岩剣』」

「はん、貴様の未熟な技が私に当たるものか」

「御主人、オレニ任せろ」

どうやら、詠春が来たようである。神鳴流に葉をもって行ってきたまたま怪我をしていた。詠春の怪我を見てあげ、技の出し方についてアドバイスをしてあげてから妙になつかれ、暇があれば家に遊びに来るようになった。そして、魔の気配のするエヴァに挑みかかるというのを繰り返している。初めのころはともかく今では軽いお遊びのようなものとなっているが。

「う、とりゃ、うわ！ やめ、はなせえ！」

「ははは、私に立ち向かってくるからだ！」

「切り足リネエゼ」

魚が焼きあがり、味噌汁や米などその他の物も用意し盛り付けて

お盆に載せ部屋に戻ると、いつものように、糸でぐるぐる巻きにされ天井からつるされた詠春と大笑いしている金髪少女。お前は本当に600万ドルの賞金首か？　ただのいじめっ子にしか見えん。

「はあ、エヴァ、飯が食いたならさっさと詠春をおろせ。詠春も負けたんだから今日はもう挑んじゃだめだぞ」

「分かった。すぐおろす。私のやさしさに感謝しろよ」

「今度こそ、退治してやる」

「ケケケ、御主人モ甘クナッタモンダゼ」

余裕綽々のエヴァと、それとは対照的に悔しそうな表情浮かべる詠春。うん、詠春、エヴァを倒すつもりなら、最低限、斬魔剣・弐の太刀を連続で放てる技能と、超高速戦ができるだけの速さがいるぞ。がんばれ、少年よ。

「飯の時間だから暴れるなよ。詠春も食っていくんだろう。用意したから食べていくといい」

「あ、ありがとうございます！」

俺の言葉を聞くと際ほどとは打って変わって満面の笑みを浮かべる詠春。うん、将来君はイケメンになるね。彼女いない暦11年齢の俺には君がまぶしすぎるよ……よくよく考えると俺って童貞を十数年守ってきた男なんだよな。もう魔法使いというレベルじゃねえな。

うん、考えるのはやめよう。なぜか鼻の奥がツンとなる。

「で、今日は何しに来たんだ？」

「えーと、もしよかったらで良いんですけど。幸弘さんが戦っているところを見たいです！」

「おお、坊やにしてはいい事を言うな。私も一度見てみたいと思っていた」

「そりゃまたどうして？」

俺は今まで別荘内で召喚した悪魔としか戦ったことが無い。勿論、外で戦闘をしたことは皆無なのだから、見たいと思うきっかけ分らない。

「先日、最強の人物は誰かって話があったんですけど、師範代が言ったんです。東堂さん以上に強い人間を俺は知らんって」

「はあ？ 何でそうなる。俺は一度もその人と戦ったことが無いぞ？」

「ユキヒロ、こっちを向け」

俺は疑問をそのままにエヴァに言われたようにエヴァのほうを向いた。すると抑えている魔力を開放し、殺気を向けてきた。

本当に敵意があるとは思っていないので、さらに疑問符を頭に浮かべていると。俺とエヴァに挟まれた詠春が顔を青くして今にも意識が途切れそうになっていた。

「おい、エヴァやめろ。詠春の奴が持たない」

「ふう、ちなみに、魔力はともかく殺氣に関して全力ではなかったが、反応を見る限り歯牙にもかけんか」

「……はあ、はあ、幸弘さんって本当にすごいんですね！」

「いや、まあ、あの程度の殺氣ならなあ」

悪魔の爵位持ちの奴の本体は、先ほどのエヴァよりも遥かに強い殺氣を放ってくるからなあ。というか、アモンとかの侯爵級以上の奴と戦ったときなんて、下準備したのに手足をぶっ飛ばされたり、腹に風穴開けられたりしたなあ。などと昔のことを懐かしんでいると、急にエヴァが立ち上がった。

「ユキヒロ、私と戦え」

おう、マジですかいエヴァちゃん？ こんな京都のど真ん中で戦えば、京都が更地になるよ。いや、冗談抜きでガチで。

「場所が——私の別荘を使えば良い」

あ、はい、要するに戦いは避けられないということですね。わかります。まあ、最強クラスの魔法使いの実力を肌で感じれるんだ良い機会とも思うか。

第5話 日常と疑問（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

感想のほうで、こちらの方が面白いとっていただけたので、こちらの更新を一先ず続けようと思います。

第6話 生きた年月の違い

きれいな円形に収められた大理石の床、西洋の城を彷彿とさせる立派な建物、リゾート地を思い起こさせる砂浜に海。

自然をそのまま押し込めたような俺の別荘とはまた違う、人工的な美しさを持った別荘の中に俺は立っていた。

「すごいですね……」

「ふははは、そうだろ、もっと驚くが良い」

中に入ってから驚いて表情で阿呆みたいに口をあけている詠春と、その表情を見て満足げに腕を組みうなづくエヴァ。

にしても、本当に俺のと違うなあ。などと、俺も詠春ほどではないが驚きがあった。

「御主人、サツサト始メヨウゼ」

「それもそうだな。少し待っている」

そういつて奥の居住スペースに入っていく、数分もすると先ほどのまでのゴシックな服とは違い黒いノースリーブの動きやすいタイプの服装に着替えて出てきた。

「では、始めるか。チャチャゼロ！」

「アイサ」

そう言っ、チャチャゼロは、自身の何倍もある片刃の剣を持ちながらこちらに突っ込んできた。

「リク・ラク・ラ・ラックライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。すべての命あるものに等しき死を――」

おい、急すぎじゃね？ などという意見を言う暇も与えず、高速で振り下ろされる刃物。しかし、普通の人間ならば、確実に死をもたらずであろう一撃であるが、俺の目にはしっかりと見えていた。

最低限の動きにてそれを回避し、瞬時に指に気を収束させチャチャゼロにでこピンをかまし、柱に打ち付けた……これぐらいなら壊れないだろう。

「――其は安らぎ也。おわるせかい。術式固定・掌握・魔力充填・術式兵装『氷雪零花』。チャチャゼロよくやった」

冷気を撒き散らし、青黒く全身を染めたエヴァは台詞が終わると同時に、縮地により俺の背後に現れ、一撃一撃が人間の反応速度の限界を超えた嵐のような拳撃を放ってきた。エヴァの周りの水蒸気が瞬間的に氷結していることから、体に触れると氷結作用があるのは明らかであるので、一つ一つ丁寧によけていく。

「ち、やはり当たらないな！」

「この程度の速度ならな」

「言ってくれる！」

降り注ぐ拳の間に、隙あらば体に絡み付こうとする糸、それらを拳は避け、糸は四肢を使い払っている。そんなやり取りをしているとき、背後から気配を感じその場から離脱した。

「ケ、大人シク斬ラレヤガレ」

元いた場所の大理石は砕け散り、チャチャゼロの持つ力を十全に見せ付けてきた。

「『氷爆』」

こちらに向けて放たれた無詠唱の呪文により氷の爆撃が襲い掛かる。すぐさま範囲外に縮地を用いて逃げる。

「……見事だな。抜き、入り共に始まりを感じることにできなかった。縮地の完成系といっても過言ではないな。だが、これならどうだ『氷爆』」

エヴァは、先ほどと変わらない、威力の魔法を放った。それを同様の方法で避けた瞬間、闇の魔法に装填されていた広域殲滅魔法が開放された。

「開放『おわるせかい』リク・ラク・ラ・ラックライラック来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪、『闇の吹雪』」

目に見える範囲すべてを凍らせていく魔法、そこに、速度が速い闇の吹雪が追加され360度完全に囲み襲い掛かってくる。

本気を出せばよくれるが、俺はあえて避ける動作をせずその場に

立ち、気の出力を上げ、それとは別に魔力を流し、一瞬で体に刻まれた魔法障壁、耐氷結、耐寒の術式を作動させる。

次の瞬間、一面が銀世界となり、空気中の水蒸気が凍り白い霧となり、視界を遮るが、俺は見えているので、チャチャゼロと共に『断罪の剣』を発動させ襲いかかってきたエヴァの攻撃を両手を向け、受け止めた。それと同時に金属同士を打ちつけたような甲高い音があたりに響いた。

「やはりか」

「ケケケ、御主人ガ霞ンジマウ位ノ化物ダナ」

霧が晴れると、俺に攻撃を受け止められている2人の姿があらわになった。にしも、一面氷の海で、北極にいるみたいだな。行った事無いけど。

そして、詠春その顔はいただけない。今写真撮られると将来にわたりいじり倒されるぐらい阿呆な表情しているぞ。

「ふん、結局一度もまともに攻撃してこなかったな」

「……まあ、理由が無いからな」

お互い本気で殺しあったら、言っただけだが、エヴァの血どころか内臓も飛び散るからな。たとえ不老不死で死なないとしても、気分はあまりよろしくない。

それに、闇の魔法を実際に見れた事やこの世界最強クラスのエヴァの氷結魔法であっても、完全に防げることが分かった事など十分

な収穫があった。

「……すごいです！　すごいです！　師範代が言っていたことは本当だったんだ！」

詠春は、なぜか興奮状態で、きらきらした視線をこちらに向ける。やめて、才能じゃ君の足元に及ばないから、別荘や本が無かったらただの凡人だからね俺。だから、そんな尊敬の眼差しでこちら見つめないで。

後、エヴァ、自分の名前が一切出てこないからって大人気なく青筋浮かべない。魔力もれてるよ？　え、ちよいといじめる？　だから薬を用意しておけ……詠春、がんばれ。

第6話 生きた年月の違い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は戦いというよりも見せ試合というかんじです。中々自分の頭の中身を文章にするのは難しいですね（笑）。

感想や誤字脱字などの報告など、書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしく願います。

第7話 戦争と過労

月が綺麗に見える和室で、着慣れた簡易な和服に身を包んだ俺と詠春は酒盃を片手に会話を楽しんでいた。その途中詠春が何か悩んでいる表情を浮かべた。

「どうした？ 悩み事か？」

詠春も今年で20歳を向かえ、少し前に近右衛門の娘との正式な婚約も決まった。ちくしょう、娘の木之実ちゃん、昔はおじ様のお嫁さんになるって言うてくれていたのに……。いいんだ、どうせ不老者の俺なんて一生結婚できないんだ。

そんな馬鹿な考えが一瞬頭をよぎったが、一切表情に出さず真剣な表情をしていると詠春は話し出した。

「……実は、魔法世界の戦争に参加しようと思っているんです」

「そうか、で、何で俺にそれを言うんだ？」

正直、そんなことを宣言されても俺には、薬を渡たり、送ってやるぐらいしかできないぞ。

「共に戦争に参加していただけませんか」

はあー！　なんで、どうして、そんな結論が出た！　そんな風に内心驚きつつも冷静な態度を崩さず、理由を聞かない限り先に進まないと思理由を聞いた。

「理由ですか？ それは、戦闘力は私よりはるかに強く、治療術に精通し、そして、薬に関しては関西いえ、世界有数といっていいほどの幸弘さんがいれば早く終わらせることができると思ったからです。どうかお願いします」

うおおお、10年ほど前の戦闘がこんなところであだに……断るにしてもここまで友人にお願いされて、迷い無く断れるほど神経は図太くないが、戦争参加して、復讐の対象になるのはごめんだ、なにより頼まれたという理由だけで大量殺戮をするような事を俺にはできない。

うーん、しかしどうすべーあ、そうだよ。何で気づかなかったんだ。別に詠春と行動を共にする必要は無いじゃないか！

「……分かった」

「ほ、本当ですか！」

「待て、戦争には参加するが、直接的に戦闘はしない。俺は、殺す側ではなく治す側で関与する。そして詠春には優先的に薬を送ろう。それだけでも全然違うだろう？」

俺が言い終わると、詠春はあごに手を当てゆっくりと言葉を吟味した後、笑みを浮かべて返事をした。

「——はい、そうですね。確かに幸弘さんにはそちらのほうがあっていきますね。いやはや、お恥ずかしい。さすが幸弘さんです。倒すこととしか考えられなかった私とは違いますね」

違います、ただのチキンハートな人間だからです。とりあえず、

これで直接的に戦闘する事は無いから武勲も立てることはできないから有名になることは無いだろう。そう俺は楽観的に考えていた。

それからさらに時が経ち、魔法世界の戦争は激化していった。そして、今現在俺は、魔法により木々は焼け、草原は地面をむき出して荒野と成り果てている戦地でいくつものテントが並ぶ中心部で怒声を上げている。

「馬鹿野郎！ その薬は、裂傷に使うもんだろうが！ 火傷の類は3番テントの中だ！ 『治癒』」

「は、はい！」

どんどん運びこばれるありとあらゆる人種を、治していく。切り傷、骨折、火傷、内臓損傷、四肢断裂。数え切れないほどの怪我の種類の中最適な術式と薬を用いて治していく。そんな中、若い男であろう叫び声が俺の耳に入ってきた。

「帝国人をどうして治さなければいけない！」

そちらの方を視界の端に捕らえるとどうやら金髪の20台くらいの端正な顔立ちをした青年が、帝国人の治療を拒否しているようだ。くそう、また連合派のボケが面倒起こしやがって！

こちらら、他所から恨みを貰わないために帝国だろうが連合だろうがその他だろうが治せる限り治すんだよ。誰か拒絶してその一族から恨みを買ったらどうするつもりだ。俺は、この糞忙しい中、時間をとられたこともあり、苛々した感情ものせて怒鳴った。

「帝国だろうが、連合だろうが、どっちも治すんだよ！ 私情挟む

のなら即刻立ち去れ！」

「いいんですか、僕みたいな優秀な人間がいなくなっても！」

腕がいいといっても替えが聞かないほどの奴はほとんどいない。それに言っただけだが、こいつは特別腕が良い訳ではない。

「ああ、かまわねえよ！　ここは、無所属の治療所だ！　人種も生まれも関係ねえ。そんなに差別したきゃ、連合の治療所にでも行きやがれ！」

「き、きさ——」「うるせえ！」

すぐさま金髪の顔面を殴り飛ばし。運び込まれてた帝国人の少女を診察する。にしても、こちらら、もう5日間も寝てねえんだよ。こんなつまらないことで手を煩わせるな！

「この傷は、23番の治療符もってこい！　そいつは、縄で縛ってどっかに捨てて来い。ブラックリストにも追加しとけよ！」

「はい——！」

畜生、こんなことなら数ヶ月前のあの時拒否しとけばよかった。そんな思いを胸に抱き今日も人を治していく。

第7話 戦争と過労（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第8話 介入者の存在と紅き翼（前書き）

介入者の存在が始めて出てきますが、人物は次回になります。

第8話 介入者の存在と紅き翼

1ヶ月ぶりに睡眠をしつかりと取れた幸弘です。マジでこの肉体でなければ過労死していてもおかしくないな。それにしても幻術で外見年齢がすでお爺ちゃんに指しかかろうとしている俺にこの苦行はどういうことだ。

「久々に詠春と会えるな。連絡でのあの件も気になるしな」

詠春には影の転移魔法を応用した魔法で魔法薬を届けている。勿論、戦闘中に送ってしまうと問題があるので長距離用の念話符を用いて事前確認はしつかり取っているし定期的に情報も交換している。

そして、こちらに来てから激務で会う事ができなかったが、どうやら、かなり初期の段階で介入者が現れたらしい。そして、未来を知っていると思えない知識を披露したらしい。で、面倒くさいことに、薬の存在に気づき俺も介入者であることを言ったらしい。それも強くマイナス印象を持つような言い方で。本当、詠春と友人でよかったあ、紅き翼とのガチでの殺し合いフラグなんて要らん。

そして、一応俺が不老であることは伝えていたので、それ以外の知りうる限りを詠春に言っていると、なぜかさらに尊敬された。あ、あれですね尊敬している人が何を言ってもすばらしく解釈されるんですね。

はあ、正直この前情報から会いたくもないが将来の不安を取り除くため行きますか。そう思い、影の転移魔法で詠春の影から出た。目に入ったのは、まだ戦争の爪あとの無い綺麗な草原と、友人である詠春の姿だった。

「お久しぶりです。幸弘さん」

「ああ、念話じゃあ、結構話していたけどな。なかなかすごい戦果みたいじゃないか『サムライマスター』」

俺の言葉に詠春は照れたような頬を緩め頭かきながら、まんざらでもない表情を浮かべた。

「いえ、『境界無き治癒者（ノーボーダーヒーラー）——』と呼ばれている幸弘さんほどじゃありませんよ」

「なんだそれ？」

え？　なにその厨二病的な二つ名は、俺は、全然知らんぞ。というか、ノーボーダーってあれだよね両方治しているからだよね。あれ建前は差別しないって事だけど、うちが無所属なのは、実際はそんな高尚な主旨を持っているんじゃないかって、個人的な思惑といちいち差別して後で恨みをもたれるのは、ごめんだという目的で俺が作ったんだぞ。

「知らないんですか？　民衆にはすさまじい人気ですよ」

「そ、そうか。まあ、いい」

本当は頭を抱えたいがまあ、とりあえず、そのことは一旦忘れよう。

「で、例の介入者はどんな感じなんだ？」

「……一言で言うとはひどいです。仲間の内2人が知識に有用性があるといって他の人間を抑えている感じですね」

人格者である詠春の苦虫を噛んだ様な表情を見る限り相当ひどいのだろう。

「ちなみに強さはどれぐらいなんだ？」

「いきなり喧嘩を吹っかけてきて、ナギがぼこぼこにすると『こんなはずじゃないのに』とか言い始めましたね」

うーん、能力自体は、おそらく魂の器のことを聞かず希望だけ言って、実際それを習得するだけの価値が無く十全に使えなかったってことだと思うが、これは俺の予想なので、思い込むのは危ないかな。それより、時間指定は100年ごとといっていたのになぜピンポイントで戦争時代にこれた？ などの疑問点が残るなあ。

まあ、俺の知りたかった介入者の実力は聞いた分ではおそらく低いということが分かったな。後は実際あって、そいつの意思と本当に評価通りの実力かを確認して、特に俺個人や友人に何かしてくるつもりがないなら関わる必要も無いか。

「じゃあ、ご対面といくか」

「あ、幸弘さん。その前にひとつ頼みがあるんですが」

詠春は、なぜか申し訳なさそうな顔をして、口を開いたり閉じたりしている。

「うん？ 詠春の頼みなら相当な無茶以外聞くぞ」

「実は、ナギとラカンがどうしても戦ってみたいといいまして、お願いできませんか？」

「それぐらいなら構わない。元々挨拶ぐらいはするつもりだったしな。詠春も久々に組み手でもするか？」

まあ、エヴァの実力から推測するに自分が大怪我することはまず無いだろうし、たった一回だけの戦闘だ。詠春からの頼みを断る理由にはならないな。

「は、はい！」

そうして、詠春の案内でついていくと、そこには、7人の人間がおり、俺の姿を見て全員が驚きの表情を見せたかと思うと、二人の少年を除きすぐさま臨戦態勢に入った。さすが実力者揃いの紅き翼、こんなおっさんと爺の中間の外見にはだまされないな。とりあえず、空気を読み詠春から紹介されるのを待つ。

「そう警戒しなくていいぞ、前から薬を提供してくれている幸弘さんだ。よかったな、ナギ、ラカン。要望を聞いてくれるそうだ」

名前を呼ばれた二人はうれしそうな笑みを浮かべ、残りの人間は警戒を解いてくれた。どうやら、変な誤解はされていないようで安心した。詠春グッジョブ！

それから互いに自己紹介を行い、しっかりと顔と名前を一致させた。

「じゃあ、おっばじめようぜ、幸弘のおっさん」

「ああ、構わない」

どうやら先手はラカンようだ。小麦色の巨漢に搭載出来るだけつけた筋肉、それよりも目を見張るのはすさまじい気の収束。やはり、エヴァ並の実力者か。並みの攻撃ではあの肉体に傷ひとつつけられないだろう。まあ、自分ならば、関係ないか。

そんなことを考えていると、肩にかかるほどの髪をした美青年のアルが俺とラカンの間に入ってきた。

「では、僭越ながら私が審判をさせてもらいますね。では、はじめ！」

アルの声が終わると共に、気の暴風が俺に襲い掛かってきた。巨漢からは想像もできないほどの速度で近づき、暴風のような拳の嵐が自分の身を襲う。しかし、俺の身には掠りすらしない。

「は、すげえなあ！　ここまで避けれる奴に会った事ねえ」

ラカンは言葉と共にさらに気の密度を上げ速度が上がっていく、はあ、生粋のバトルジャンキーだな。強敵を目の前にすれば、さらに強くなっていくか。あ、うん、すげえは。

ラカンの肉体を見れば努力していることは分かるが、俺が同じだけ努力すれば同じ頂につけたかと問われればNOだ。これが才能の絶対的差か。まあ、反則をしている俺がいえたことではないけどな。

顎に対して手刀一閃、おそらくぎりぎり手か足どちらかを繰り出したかを分かったのは、俺の動きを一番見たことがある詠春ぐらい

だろう。そして、意識を刈り取られ崩れ落ちるラカン。

「審判、判定は」

「――は、そこまで、勝者幸弘」

俺の声を聞き、宣言はしたがアルは信じられないようなものを見た表情は、今だ変わらなかった。

「は、すげえぜ。あのジャックを一撃かよ。次は俺の番だぜ」

「では、はじめ！」

ナギは合図と同時に小柄な体を生かしたすばやい動きにて、的を絞らせなよう凄まじい速度で動き回りはじめ、懷からアンチヨコを出して、呪文を読み上げる。え、マジか、アンチヨコ使う奴がリーダだと、そんな馬鹿な。

「契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ――」

こいつ、ふざけているのか？ そんなもので最高クラスの呪文を発動できるわけが無い。

「――巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重、千重と重なりて、走れよ稲妻、『千の雷』」

しかし、俺の予想とは裏腹に、滅茶苦茶な術式であるにもかかわらず、十全に発動した。あ、ありえん。そんな感情を胸に秘めながらも。俺は、冷静にエヴァのときと同様に気で肉体を強化し、魔力を体の術式に流し耐電と耐熱の障壁を張る。そのまま千の雷の中を

突っ込み、使った後の一瞬の硬直状態を突き、顎を掌底でかち上げようとする。

「障壁最大！」

ナギは避けないことを悟り、障壁を最大に展開した。しかし、魔力に頼ったその程度の障壁では、俺の掌底は止められない。

「す、げえ、ぜ」

障壁ぶち抜き、顎と脳に深刻なダメージを受けたナギはそういつて意識を失い、倒れた。俺から言わせて貰えば、あんな術式でしっかりと発動できるお前がすげえよ。っと心の中で突っ込んだ。にしても、やっぱりこいつも俺とは才能が違いすぎる。

分かりきっていたことだが、やはりショックだ。俺がこのレベルの魔法が十全に使えるようになるために必要だった時間を考えるとつらくなる。はあ、なんか、目的を果たす前にすげえ疲れたな。

第8話 介入者の存在と紅き翼（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

すみません。改行がすごいことになっていたので編集しました。

第9話 介入者の思惑（前書き）

初めての介入者視点です。この後もう1話今日中に投稿します。

第9話 介入者の思惑

紅き翼の秘密基地に、僕はいる。ふふふ、それにしてもさすが天才級の才能を持つ僕だな。僕以外の介入者がいたのは誤算だけど、それを組み込んだ新しい作戦をすぐ思いつくなんて。

「あいつら僕のすばらしい作戦に気づいていない」

それに、今日はどうやらあの場にいた残り4人のうち1人が僕に合いに来るようだ。

ふ、ふははは、笑いが止まらないね。そんな風ににやけているとドアをノックする音が聞こえた。

「……入れ」

「お、えーと、あの場にいた1人でいいんだよね？」

入ってきた男と目が合い。光の所為か少し視界がゆがんだが、すぐに戻り、顔を見合わせた。

なんだこいつ、ほとんど爺じゃん。それに別にかっこよくも無いのに容姿を変更しなかったのか？ はん、馬鹿だなあ。それとも自分をかっこいいと思っている勘違いのナルシストか？

まあ、銀髪でオッドアイの美形になった僕のことからなくなるのは無理も無いよね。僕の尊大な心で許してあげるよ。どうせもうすぐ死ぬんだしね。

「そうだ。君も態々無駄足ご苦労だな。僕がいるから君はいらないよ」

「あゝ、別にあんたの原作介入の邪魔しに来たわけじゃない。あんたが、他の介入者は皆殺しだゝって考えをしているかどうかを知りたいだけだから」

「……なんで僕がそんな面倒なことをしなきゃいけないんだ。もうこれで用件は終わりだろさっさと出て行ってくれ」

本当にこいつは馬鹿だな。僕の要望通りたった一人できやがった。後は背後を向いた瞬間。僕的能力である直死の魔眼と体術を駆使して、殺す。

「はあ、時間を取らせて悪かったな」

そういつて立ち上がり、背後を向いた瞬間、四肢の死の線をなぞり達磨にして、声を上げれないようにのどを潰す。あっけなく男はひっくり返りもがき苦しんでいる。

「ははは、なんだいその信じられないもの見たような目は、どうせ、紅き翼の連中に僕は雑魚とでも教えられていたんだろ」

「あ、う、があ」

何か言葉を発しようとするが喉が潰されているため呻き声にしかない。そうだよ、この圧倒的な優位な立場。これこそ僕がいるべき位置。紅き翼の馬鹿どもは役目が終わったら殺してやるがな。僕の作戦のためとはいえ散々見下したんだ残虐に殺してやる。

「ふふふ、冥土の土産に教えてやるよ。紅き翼にぼこらたのなあれわ・ざ・とだよ。簡単にだまされて馬鹿ばかりだな」

まあ、そのおかげで作戦を決行できるんだけどね。

「ああ、元々僕以外は皆殺しにするつもりだったから。まあ、君は僕の作戦に使われるだけ光栄に思えばいいよ。内容を知りたいかい？」

「ぐあ、はあ、だ」

どうして、そんな懇願するような表情をする足元に転がっている男。ああ、なんて僕が望むとおりの表情をする男なんだ。僕は死なない程度に蹴りを入れ。気分良く話した。

「君が紅き翼に取り入るために僕を操っていたって設定だよ」

「ああ、じよ、し、て」

「続きが聴きたいかい？ 仕方ないなあ教えてあげるよ。君に操られていたけど本人を前にして自分の人格が目覚めたってことにしてね。何とか君を殺して支配下から逃れたって言って今までと態度を180度変えるんだよ。始めは疑うだろうけどあいつら馬鹿でお人よしだからきつとすぐ信じるよ」

こいつは、どうせ、僕と違い戦闘系の能力をもらわなかったのだろう、おそらくサポート系統の能力を貰って後方支援系で甘い汁を吸おうとしたのだろう。だが、甘い甘い、僕が主人公だ他の介入者なんて入らないよ。もうそろそろいいかな。

「あ、た、じゅ」

「見苦しいね。バイバイ」

そして、首を落とし止めを刺した。ふう、ここから演技がだるいけど、将来のためだからね。後3人か、あのデブはすぐに殺せるとして、あとの二人が問題だなあ。まあ、英雄の権力使って悪に仕立てて殺せばいいか。やっぱり、僕って天才かも。

外に人の気配がする。どうやら誰か入ってくるようだ。ふふふ、僕の演技力を見るが――。

「ど、どうして」

「保険は、本当大事だな。色々と聞けて楽しかったよ」

どうして、今殺したはずなのに！ どうして、どうして、どうして――。

第9話 介入者の思惑（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

いくつもの感想をありがとうございます。

感想で心配していた人がいるので、少しばかりこちらにかいておきます。（必ず読む必要はありませんし、作者の完全な私見なので、不快に思う可能性もあります。それでもいい方はどうぞ）

まず、今回の介入者はかませ犬でしたが、今後こういうタイプは出ませんのでご安心ください。

次に、直死の魔眼とかの特殊能力はどういう風に価値が決まっているかの私の考えを述べたいと思います。

能力というものは、それを手に入れるための条件が達成困難なほど高くなります。もちろん達成不可能なものは手に入れることはできません。

今回の場合、直死の魔眼を手に入れるにあたり一番の難しい条件は死を経験することだと私は判断したので、それをクリアしている介入者は、手に入れることができたと考えています。

後、魂の価値についてですが、性格などは関係ないと考えています。これは感想のほうでも述べさせていただいたのですが、性格はその立場、時代、場所によって好まれるもの、嫌われるものなどは変わるものであり、また、性格を築いていくのは周りの環境が大きく依存していると考えているので魂自体の価値には含まれないもの

としています。

才能は、作者の私見ですが、対時間効果とかがえています。天才ができたところはその何百、何千倍もの時間をかければ凡人もできるのではないかとい考えでいてます。ただ、人間の生には限りがあり、凡人がそれを身につけるころには死ぬので、圧倒的に時間が足りないのでは考えてます。私は、目の前に、数多の道があり、天才は初めの一回で正解の道を見つけ歩き出しますが、秀才は、幾度かの検証をして正解を見つけ、凡人は、総当たりで正解を探すという違いあると考えています。

長々と失礼しました。読んでいただきありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。

第10話 手入れたものと決断（前書き）

今日2話目です。

第10話 手入れたものと決断

いやはや、油断大敵というが、本当、保険賭けといてよかった。まさか直死の魔眼を持っているとは、あれで攻撃されていたら死んでいたな。

保険というのは、扉を開けて目が合った瞬間幻術をかけた。対応策を色々講じているうちにかけるのも得意になった……悪魔の幻術とか人間のやつの比じゃないしな。それにしても、まあ、喋るわ喋る。そばで聞いてて笑いそうになったわ。

で、俺が気絶させた後、こいつをどうするか紅き翼が話し合った結果。原作知識および紅き翼と共に行動したという記憶を消去で、近くの町に転送するということになった。ちなみに、始めは直死の魔眼の危険性ゆえに殺したほうがいいという話だったが、眼球を抉り取り、魔法で治療すると直死の魔眼ではなくなっていたのが大きく、他にも異能が無いかわ調べ、問題があまり無いということ、さっきのような結論至った。ちなみに眼球は俺が貰っておいた……自分に原理が分かるとは思えないが、調べるだけ調べてみよう。うまいければ今後の戦力となるしな。

それにしても、名も知らない介入者よ、本当によかったな。直死の魔眼が初めの眼球のみ対象にしている、複製してもそのまままだったら殺されてたからな。

俺は、いつまでも紅き翼と一緒にいるつもりは無いので、用件を済ました後すぐさま自分の治療所に戻ると行く前より遥かに多い業務におわれるはめに……ちくしょう。戦争終わったら絶対隠居してやる。そんな決意を胸に片っ端から怪我人を治療していった。

にしても、何だこの数、特に金の使い道が無いから貯めていた金の大半を設備につき込んだとはいえ、たった2、3日でなぜ100人は収容できるテントが10も増えるんだ。患者＋治療者＋護衛兼荷物運びの全員合計すると10万近く入るんじゃないか？

まあ、護衛や荷物持ちは直った患者がただでしてくれるし、治療者も給料は要らないといっているから結局、最もかかる人件費が必要ない事と、治療した人物の援助のおかげで財政破綻はおきていないがもう一個の移動都市だぞ。などとぶちぶち心の中で文句を言いながら1年の時が過ぎた。

そして、一年の時が過ぎた、更なる激務に追われてな！ どうして、怪我のしてない奴らが保護を求めてくるんだよおおお！

ちくしょう、メガロのボケ共、何で希少技能を持った民族を捕まえようとするんだ！ おかげで、こっちにそういう類の奴らがガンガン流れて着て来るだろうが。

そんな風に、ある種の限界点に達していた時、詠春から念話がきた。

「……つもしもし、なにかあったのか？」

あぶねえ、友人に当たってしまうところだった。さすがに愚痴とは違い、周りに当り散らすのは人として終わっている。

「はい、完全なる世界の本拠地を見つけ今から攻めるところです。私達が本拠地に攻めるので周りの敵から、自軍を守ってほしいのですが、どうですか？」

この内容を聞いて俺はどうすべきかと思考をめぐらした。現在俺が死ぬほど忙しいということは、別の言い方をすれば俺が抜ければ治療所の死亡者が増えるということだ。しかし、今までこの手の事を頼んでこなかった詠春が頼んできたということは、重要性は言うまでもなく、現在の戦力では心許無く、危険性がかなり高いということだ。うーん、どうすべきか。

「詠春、そっちは俺がどうしても必要か？」

俺の質問に対して、少しの沈黙の後、先ほどよりさらに真剣な声色で話し始めた。

「……はい、正直な話、現戦力では厳しく、連合、帝国とも間に合わないの現状です。この戦いで私達が負ければ世界は終わります」

あーくそう、前言ってた世界を無にする儀式か。それなら、ここに残ったとしても詠春達が負ければ、終わりってことか。なら、行くしかないな。

「分かった。すぐ転移でそっちに向かう。俺は、お前達が外を気にせず戦える場を整えればいいんだな？」

「は、はい！　ありがとうございます」

詠春のうれしそうな声を聞くとほぼ同時に、転移魔法を発動し、決戦の場である墓守り人の宮殿に飛んだ。

第10話 手入れたものと決断（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

明日から3日間ほど実習で忙しくなり更新が難しくなりそうです。

感想のほうは返せると思います。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

第11話 真実と自己満足（前書き）

実習後にボチボチ書いていると、できましたので投稿します。前回同様少し短めです。

第11話 真実と自己満足

転移先にいた詠春と紅き翼、それに部隊展開をしていた代表者と挨拶と今後の方針についてすぐに話した。その時、混成部隊の代表者たちが、治癒者として優秀であっても戦闘のほうは大丈夫なのか？と当然の質問をしてきたので、紅き翼の連中が要らないことを言う前に、詠春と縁があり、関西呪術協会とつながり持つもので、防御系統の符術には自信があるといっておいた。

ここで派手に魔法戦などしてみろ、すぐに紅き翼の仲間入りだ。しかし、ここで、日本独自の符術を使えば、魔法使いの元締めであるMM元老院も俺を祭り上げることをし難いだろう。まあ、最後の悪あがきって奴だな。

そして、詠春達紅き翼は本拠地、墓守り人の宮殿に乗り込んだ。ふう、なら、俺は、さっさとこの空を黒で染め上げほどの数の魔物や悪魔からの攻撃を防ぎますか。話しの内容を聞くと時間さえあれば援軍が来るらしい、ならば、俺がするのは攻撃ではなく現戦力を一切減らさないことだ。

符術により、時は、悪魔や魔物を結界に閉じ込めたり、相手の攻撃から艦隊を守ったり、怪我人が出れば転移符を使い、艦間を飛び回り治癒してすぐさま戦線に復帰させる。それを延々と繰り返していた。

そして、そのループは、墓守り人の宮殿からの紫電様な光線が見え、それを合図とするように終わりを迎えた。

「ナギの奴がやったか」

ここからでも俺の視力なら、しっかりとナギが黒幕らしき黒ずくめの奴を殴り飛ばしているのが見える。そして、確か仲間のゼクトだよな落石の中で異様な雰囲気で会話をしているが……くそ、ここからじゃ落石が邪魔で読唇術が使えない。しかし、そんな様々な思考を驚愕の感情で塗りつぶすには十分すぎる現象が始まった。

「……っ、なんだ！　これは！」

魔力減衰、いや、消失現象は、体に刻み込んでいる解析の術式をフルに発動して、どんどんあの現象についての情報を取得していく。マジか、そう思い、今得た情報を元に魔法世界自体にも解析を行う。

「おい、おい、おい、この世界が造られた人造の世界だと……いや、なら、あの術式は確かに世界を無にする儀式だ」

魔法でこの世界ができているならその根本となる魔力が消失すれば、消える。ちょっと待て、なら、この世界が人造の異世界とするならこれと同等の現実の土地がいるぞ。こんなもの地球上に……他惑星か。

しかし、俺が思考している間にも儀式は着々と進行していく。現在までに積み上げてきた膨大な知識と手に入る情報から中心にいる魔力完全無効化能力を持つ黄昏の姫巫女ごと封印する術式を考えはつく、しかし、この現象を完全に無効にできる方法が無い。

そして、俺が対応策を考えている中、おそらく話の中に出てきた援軍なのだろう多くの艦隊が現れた。それらはすぐさま世界を終わらす儀式を封印するため術式を発動した。

「駄目だ。その術式だと、オスティアが落ちる」

その場に浮かび上がった魔方阵から解析するに俺が考え付いた術式とほとんど同じである。だが、それだと、あれ以上影響が広がらないだけで、すでに影響下にいたオスティアは、魔力消失現象の影響を受け落ちる。

どうする？ 落ちないようにするのはもう無理だ。そうだ、落ちないようにするのが無理なら落ちても被害が出ないようにすればいい。おそらく、この術式を発動した人間は、落ちることを知っているはず、なら、避難などのゴダゴダはそいつに任して落ちる速度を落とすことのみに集中するか。

ふう、何で俺がここまでしなきゃならないんだという感情はあるが、別に命を懸けるわけでもないし、ミスをしたからといって現状よりひどくなるわけでもない。なら、まあ、やって助けられる命があるんだ、それを知ってしまったら仕方ないよな。

俺は、ふっと笑みを浮かべ、すぐさま準備に取り掛かった。

第11話 真実と自己満足（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第12話 逃亡と平穏（前書き）

実習が思ったよりも速く終わったので更新します。
やっとこさ戦争が終了して京都に帰還です。

第12話 逃亡と平穩

あれから、オスティアは俺の予想通り落ちたが、俺が落下速度を軽減させたので怪我人こそいるが、死人は出なかったらしい。俺は完全にオスティアが落ちてからすぐさま転移して自分の治療所に戻った。そして、後悔した……数日のときが過ぎ、数多くの難民が俺の治療所に流れ着いたのだ。

そのおかげか、色々周りから情報は入ってくる。しかし、正直目の前の人員整理や俺が外出していた分の要治療患者の治療や管理などで、それ以外のことに気を回す暇はなかった。ふふふ、どうやら、この戦争は終わってもなお、俺を過労で殺すつもりらしい、

それからさらに2年の時が過ぎ、数十万という人数に規模が膨らみ、しかし怪我人の減少や仲間内の役割ができたおかげで落ち着きを見せてきた、すると一緒に行動していた奴らが都市を作るとか言い始めたので、さっさと逃げ去った俺に罪はないと思う。そして、現在。

「ああ、ぎもちじい」

京都の家に戻りマッサージ器に凭れ掛り、ここ4年間は味わえなかった開放感を感じている。それにしも、どうやら、墓守り人の宮殿での俺の活躍は一切発表されていないらしい。よかった、予想通り剣士などの近接専門以外で魔法使いで無い者は、MM元老院的に英雄にしくなかつたようだ。しかし、その反面、治癒魔法使いとしては、立派な魔法使いとして認められるものと公にしたらしい。まあ、折角帰ってきたんだ。今はゆっくりしよう。

「で、ユキヒロは、魔法世界の戦争にまで参加して何をしてきたんだ？」

おお、これはこれは、俺が激務をこなしていた時に俺の家で4年間引きこもり続けていたエヴァじゃないか。また可愛らしい黒のゴシックロリータな服を着て甘味でも食べに行くのか？

「なんだ、その視線は？」

どうやら俺の皮肉を含む心のうちが視線に出てしまったようだ。

「別に他意はない」

「それにしても、久々だな素顔を見るのも」

「まあ、こっち方がやっぱり落ち着くしな。さすがに今回の1件は疲れた」

「……まあ、私としては素顔のほうが好きだがな」

エヴァは、軽く頬をかきながら言った。あらら、まあ、エヴァの外見考えると20ぐらいのこっちの外見年齢の方があってるか。爺の外見と違い犯罪者に間違えられる危険性があるのが問題だな。

「でだ、さっきの質問に戻るがいったい何をしてきたんだ？」

「あゝ、行くとき言っただろ戦争に参加してくるって、まあ、俺は治癒者として怪我人を治しまくってたよ。ついでに有名になってしまったからは、折角だし無理しない範囲でエヴァのイメージを改善させることもできるかなあって思ったけどマジで有名なのな闇の福

音殿。治療所の人間は、俺の話を聞いてくれたが、結局それぐらいだったな」

結局個人でできたのはその程度の事のみ、懸賞金の解除とかは例え民衆の間で有名になっても権力が無きや絶対無理だ。やっぱ物事を思い通りにするには、武力よりも権力とお金だよ。

俺の質問の答えを聞くと、エヴァは頬を紅く染め、そっぽをむきながら、返事をしてきた。

「ふん、別に構わん。こうしてお前のおかげで、京都限定だがわずらわしい思いもせんで良いからな。それには礼を言う」

「え、なんで俺のおかげなんだ？」

次は何言ってるのこいつ？ みたいな呆けた表情になった。紅くなったり、大口開けたり忙しい奴だな。

「はあ、お前はそういう奴だったな。お前が神鳴流から一目置かれてるのは知っているな？」

「ああ、大量発注はそこからの要請しか受け付けていないからな」

武力があり、権力があり、お金もある。おかげさまで、いらぬちよっかいをかけられたのは数えるほどしかない。

「そして、幸弘の薬は神鳴流を經由して関西呪術協会に回されている。はつきり言うぞ、お前の薬の単価あたり効果はほかの薬が使えるなくなるレベルだ。関西呪術協会としてもせっかく独占しているのに、お前にちよっかいをかけて友人である近右衛門を頼り関東にい

かれては多大な損失となる。だから、お前のゆ、友人である私の事もスルーしている」

ああ、独占したいから、悪さしない限り見逃してあげるよと。ここにいれば他の所と違って友達を襲う奴はいないよって事をアピールしてたのか。すまないな今まで気づかなくて。後、なぜ友人と宣言するだけで顔を紅くする。

「なるほど、でも、最悪武力で脅そうとかは考えなかったのか？」

「……はあ、強者であればあるほど、お前の強さを明確に理解できてしまうんだ。上層部の術者どもや神鳴流の師範級の連中は是が非でも戦闘を避けたいだろうよ」

あの、その人外設定いつついたんですか？ ……本当、いつの間にそんな大げさなポジションに。正直自衛のために付けた力だから誇示するつもりは一切無いのだが。

「なんか、色々と面倒くさいな」

「まあ、向こうが勝手にしていることだ。ユキヒロが気にする必要も無いだろう」

確かに、何十年も住んでて気付かなかったんだ、今までどおり過ごすだけか。

「うむ、それにしてもだ。今日は、良い天気だから、甘味屋にでも行かないか？」

尊大な口調とは裏腹に、10歳程度の可愛らしい容姿に不安の表

情を若干浮かべ、少し上目遣いにかがってくる姿を見ると本当にエヴァが魔法世界の奴らが言っていた極悪な存在には見えないな。

「それもいいな。ちょっくら用意してくる」

とりあえず、爺の容姿にチェンジして、外出用の着物に着替え、玄関先にいるエヴァの元に行くとなぜか俺の顔を見た瞬間不満げな表情を浮かべた。

「む、素顔で行かないのか？」

「あゝ、さっきの話からすると正体偽る必要も無いのか」

ここら一帯の裏を支配している関西呪術協会から、吸血鬼が黙認されているんだ。不老者が増えても大丈夫か？ まあ、さっきの話に出てきたみたいに最悪の場合近右衛門を頼ればいいか。あいつも何度か自分が学園長をしている学園都市に来ないかと誘ってきてくれているしな。

すぐさま幻術を解き、エヴァと共に外に出た。こんな日々が毎日続けばいいのになあ。

第12話 逃亡と平穏（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字脱字などの報告など、書き添えていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

第13話 迷子と勘違い（前書き）

研究室でのフットサルで熱中症になりかけました（笑）。
今回は、黄昏の姫巫女ことアスナちゃんがでます。
よろしくお願いします。

第13話 迷子と勘違い

晴れ渡る空、澄んだ空気、そして、目の前にいるオレンジ色の長い髪をツインテールにした無表情だが可愛い幼女。

「……君は迷子か？」

現在俺は爺スタイルで歩いていた。いやね、この前エヴァと一緒に街中歩いたら、『薬屋さんのお孫さんかい！』というかあの爺さん結婚してたんだ……』と会う人、会う人に言われるのも面倒くさくなり、適当に帰省中と言うことにしてその場を濁したので昔と同様に基本的に爺スタイルでいる。こっちの方がなれているしな。

それに今回のような場合に不審者に見えないというのも一つの利点だと思う。

「……違う」

「そうか、じゃあ、お父さん、お母さんがどこにいるか分かるか？」

「いない」

ありゃあ、これはまずいこと聞いたかな。どうやら親がいないお子さんのようだ。ああ、この子の表情に感情の起伏が現れていないのは、親の死が原因なのかもな。

とりあえず、警察に連れて行ってやるか。その道中で保護者が見つかれば御の字だな。

「じゃあ、一緒にいた大人の人をお爺ちゃんと一緒に探そうか？」

俺の言葉を聞いた後、穴が開くほどこちらの目を見詰めてき、数秒ほどそのまま時間が過ぎた。それで何か幼女にしか分からない結論が出たのかこくりと可愛らしく頷いた。

「よし、なら、ついておいで」

そういつて手を握った瞬間俺が自分自身にかけていた幻術の術式が破壊された。この現象は、魔力完全無効化能力！ この子は、ウエスペルタティア王国の黄昏の姫巫女か！ なら、保護しているのは詠春達紅き――。

「アスナから、手を離せこの下郎が！」

思考を遮るように、綺麗な金髪をなびかせた女性がいきなり襲い掛かってきた。その叩きをいなし、そのまま地面に転ばし取り押さる。叩く手にこもっていたのは王家の魔力ということは、この女性がアリカ姫か。そして続々と集まってくる紅き翼のメンバー。アリカ姫が取り押さえられているところから、魔法関係者と予測したのだろうアルがしっかりと人払いと認識疎外の結界を張った。いや、違う。あいつこっちを見て軽く頭を下げやがった。

「てめえ、どこの誰だ――」「阿呆！」ぐへえ、なにすんだ詠春！」

ナギが見知らぬ俺に突っかかろうとした瞬間、その頭部に詠春の気のこめた拳骨が炸裂した。

「少し静かにしている！ ナギ！ 幸弘さん、いきなり襲い掛かってしまいしません」

詠春の言葉に信じられないものを目にしたような表情になるアル以外のメンバー。まあ、俺が不老だって知っているのは、この中では詠春だけだからな。なのに、アル、お前は何故笑みを携えたままなんだ。

「いや、方法はどうかと思うが、自分たちの守ろうとする行動は正しいから、頭を上げてくれ」

詠春よ、何故か魔法世界に行く前よりも俺に対する尊敬の念と言うか憧れというかを感じるのだが？ 何がお前の勘違いを加速させた。

頭の回転が速いガトウはすぐさま俺が不老であることに思い至ったのか納得した表情だが、そのほかのメンバーは、同一人物であることが納得できないようである。

「そんなもの、殴れば、分かんだろ！」

そう言って突っ込んできたのは先ほどまで蹲っていたナギだった。この馬鹿。こんなところでお前みたいな原爆並みの攻撃ができる奴が暴れたら京都の町が平地になるぞ！ 俺は、アリカ姫を片手で抑えており、後ろには黄昏の姫巫女がいるので、その場に止まり。片手で、ナギの拳の嵐をいなしていく。それを見て納得の色をしめすのは、本人のみ。ああ、もうこの戦闘狂は！

「ははは、こいつはユキヒロだ。あいつ以外いねえよ！」

「一度しか拳を合わせていない俺を褒めてくれるのは嬉しいが、分かったのなら拳を止めてくれるとうれしいな！」

しかし、俺のかけた言葉とは逆に魔力の密度を上げていくナギ。もう何この戦闘馬鹿、

くそう、ナギレベルの人間をその場に止まり、その威力を完全に片手でいなし続けるというのは正直面倒くさい。

「はん、止めたきゃ止めりゃあいいいじゃねえか。契約により我に従え——ぐほあ」

大技を出そうとした、常人では隙とは呼べないほどの僅かな詠唱による集中力の散漫により攻撃にできた隙をつき、ナギの顔面上段蹴りをいれ、その足で続けて顎先を蹴る。そして、前回の戦闘同様、崩れ落ちる自称最強の魔法使い。

「ふう、マジで面倒くさい奴だな」

「どうやら、私の勘違いだったようじゃな。すまなかった」

「いや、さっきも言ったけど、まあ、威力はともあれ行動としては普通だと思うから別に気にしてないから」

すぐさま極めていた腕を放す。自分の身内が、見知らぬと男に連れ去られようとしていたなら、助け出そうと思うのは普通だろう。しかも、黄昏の姫巫女ほどの希少価値を持つ人物ならなおさらだろう……相手が一般人なら間違いなく気絶していただろうがな。

「まあ、どうせ俺の家はこの近くだ。そこで、今までの話でも聞かせてくれ」

こうして、我が家に紅き翼を引き連れて帰っていった。

第13話 迷子と勘違い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

私の勘違いでゼクトの名前が出ていたところを修正しました。

申し訳ございません。

第14話 休日と平穩（前書き）

久々の丸一日の休みです。いつの間にかお気に入りが1000件突破していたんですね。多くの方々に見ていただけてうれしいです。

第14話 休日と平穩

あれから家に招きいれ、最終決戦以降から京都に来るまでにあつた出来事について聞いた。アリカ姫が罪をきせられ投獄されたこと、それを助け出したこと。クルトという前にいた少年と袂を分けたこと。黄昏の姫巫女であるアスナのこと。様々なことを聞いた。そして、最後に詠春達から、アスナの面倒を見てくれないか真剣に頼まれた。

理由としては、MM元老院にアスナは狙われる可能性が少ないが、あり、その脅威から守れる人間の中で最も信頼できるのが俺らしい。ちなみに、断ればガトウが身柄を預かるらしい。

俺としては、十分な儲けはあるし、人一人ぐらい養うのは、全然構わない。それに、日本でのメガロの本拠地である麻帆良のトップは近右衛門であるし、旧世界なら襲われる心配も少ないだろう。なので、後はアスナ本人の意思しだいというと、本人は別に構わないと言ひ。引き取ることとなった。ちなみに、話の終わりに帰ってきたエヴァとナギが戦闘を開始したので、俺がお仕置きし、そのやり取りの所為で完全にそれまでシリアスな空気は四散した。

そして、あれから数週間時が過ぎ、さらなる親睦を深めるために、店の休みの日には、京都の町をアスナとなぜかいつも付いてくるエヴァの3人で散策している。先日アスナに触れると幻術が掻き消えたが、どうやら自身に直接害のあるものは消してしまいうらしい。前回消えたのは、見知らぬ人間に連れて行かれるというのが自分の無意識下で害と感じたからのようだ。なので、いい機会だと思ひ若い姿のまま外に出ることにした。しかし、こりゃあ魔力完全無効化能力のコントロールの練習はしておかないとな。空を飛んでいる人間

や箒に捕まったときなどに発動したら洒落にならないな。

「はい、アスナ、この店の八つ橋はおいしいぞ」

俺が、行きつけの甘味処で買った八つ橋を箱から取り出して左側を歩いているアスナに手渡しで渡すと、モグモグと小動物のように小さな口で一生懸命食べ始めた。

「……おいしい」

表情の変化はほとんどないが、最近やっと声の調子から少しだが感情が読み取れるようになった。今のは、若干嬉しそうな感情が含まれているな。うん、小さい子は本当かわいいな。そう思い癒されていると、俺の右側を歩いていたエヴァに袖を引かれた。

「私にも、よこせ。その八つ橋はお気に入りなんだ」

「はいはい、いつも食べているだろうに」

ふん、とそっぽ向きつつも。しっかり受け取り食べている姿は、真祖の吸血鬼とは思えぬほど子供っぽさだった。まあ、これはこれで微笑ましいんだけどな。

「……もう一つ」

「おっ、気に入ったか。そりゃよかった」

アスナの頭を軽く撫で、もう一つ取り出し、渡す。そうすると、何故かエヴァがまた要求してきたので普通に渡すと何故か不機嫌になった。意味が分からない。

そんなこんなで、京都の町を一通り散策し終わった。あく本当にこんな平穏が続けばいいのに。

第14話 休日と平穏（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

感想で、ああ、なるほどと納得できる内容がありましたので訂正をしたいと思います。ご感想は自分になるほどと思ったものは真摯に受け止めようと思うので、どんどんください。

第15話 半妖の子と将来（前書き）

感想を見て、確かにと作者が納得でき、自身で不自然な点があったので前話の介入者のくだりを消しました。

今回、原作キャラがまた出てきます。

どうぞよろしくお願いします。

第15話 半妖の子と将来

あれから、木之実と詠春の結婚や、ナギ達がリョウメンスクナノカミをフルボッコにしたのち立ち去った。

詠春は、関西呪術協会の長に就任し、その後、木乃香ちゃんが生まれたり目出度い事が続いて起きた。他にも、アスナがユキヒロやエヴァみたいに強くなりたいといい、エヴァと共に修行の手伝いをしてやると、異常ともいえるほどの才能を開花させどんどん強くなっていった。そんな風に日常を過ごしていると、詠春から頼みたいことがあるので家に着てほしいと連絡があった。

ああ、それと素顔で暮らしていたなという話を酒の席で話しただけなのに、詠春と近右衛門が新たな戸籍を用意してくれ、幻術を使う必要が完全に無くなり素顔で活動するようになった。幻術で変装していた爺さんのほうは隠居したということにし、数年してから死亡扱いにするようだ。そんな風に考え事をしていてどうやら来たようだ。そして、戸を開け、入ってきたのは詠春と3，4歳ぐらいであろう女の子だった。

「それで、相談事というのはその女の子のことか？」

「ええ、実は——「鳥族と人間のハーフだろ」、やはり分かりましたか」

詠春がつれてきたのは、アルビノの様に白い髪と紅い瞳をした幼女だった。体に刻み込んでいる解析術から、半人半妖であり、その妖怪の血が鳥族のものであることはすぐに分かった。

「で、その子をどうするかって話か？」

「それもありますが、木乃香に呪術や魔法の存在を教えるかどうか迷っているのでその相談を」

その子は、詠春の袖をぎゅっと握り、俺を何か恐ろしいものでも見るような視線で見ている。まあ、ハーフだから色々大変なめにあったのだろうが、そこまで怯えられると地味に傷つくなあ。

「まあ、木乃香の魔力量はナギやエヴァよりも多いからなあ。期待もよさられているだろう」

「はい、そのせいで、外に出るのも、人と合うのも制限しなければなりません。もう少ししたら寂しい思いをさせてしまうでしょう」

自分の子供を好きなように遊ばせて上げる事もできないことは、親としてもつらいのだろう。悔しそうな表情を浮かべていた。

「で、その子を友達兼護衛にするってことか？」

長としては妥当な考えであろう。ハーフの子ならば誰かの差し金という心配も無いしな。これほど幼い時から共にいれば信頼度も全然違うだろう。

「……護衛は、本人しだいですが、遊び相手にはなってもらいたいと思っています」

護衛ではなく遊び相手ねえ。なるほど、遊び相手ならずつとそばに必要は無いか。

「はあ、この子を俺に預かって欲しいってことか？」

「……はい。私が預かれればそれを良く思わない人間が刹那君を精神的に追い詰めるでしょう。幸弘さんなら信頼もできますし、周りの人間も強く出ることとはできませんから」

その信頼は嬉しいが、刹那か？ この少女は、俺のことビビッ―あれえ？ いつの間にか恐怖を含んだ表情ではなくなっていた。うーん、詠春と話しているから悪い人じゃないと思ったのか？ まあ、この年位の子は直感で判断しているだろうから考えても分からないか。とりあえず、笑顔を作り。

「君が刹那か、綺麗な髪と瞳だなあ」

そう言って、アスナやエヴァの頭を撫でるときのように優しく撫でてやった。はじめはビクンと緊張していたが徐々に力を抜いて頭を預けてくれた。

「お、おじさん。うちの髪と眼、きもちわるないん？」

「いや、すごく綺麗だと思うぞ」

刹那は、上目使いで、少し涙目になりながら、恐る恐る聞いてきた。というか、素顔の俺におじさん言うなお兄さんといいなさい。

「でも、うち、は、羽、はえとるし」

「見せてごらん」

「……………うん」

長い沈黙の後、刹那の背に、美しい白い翼がひろがった。

「おお、すごいな、天使みたいじゃないか」

「ほんま！」

そう言って、翼を軽く撫でる俺に詰め寄ってきた。どうやら、翼をほめられるとは思っていなかったようだ。

「ああ、本当だ。ハーフだろうがなんだろうが、両親が愛し合って生まれたんだ。大切にしろよ」

ハーフは基本的にどの種族でも排斥される。しかし、逆にそれが分かっているながらも愛し合い、子をなすので、親の子に対する愛は深い場合がほとんどだ。ゆえに、幼くして両親が死んでしまったときは、大変だがな。

ふう、詠春に保護されたということはまず間違いなくこの子の両親は死去しているんだろうな。しかし刹那はそんなことを感じさせない可愛らしい笑みを浮かべ元気よく頷いた。

「うん！」

ああ、なんて素直なんだ。この素直さの半分でいいからエヴァが身に付けてくれれば物凄く可愛いのに……うん、ちょっと待て、俺の周りってみんな幼女ばかりのような？

気にしたら負けだな。そしてまた刹那の頭を撫でてやる。気持ちよさそうに猫のように目を細め、抱きついてきた。そのままグリグ

りと撫でていると。

「やはり、幸弘さんに任せてよかった」

と言いながら、詠春がすごくいい笑顔でこちらを見ており、無茶苦茶恥ずかしくなったので、それをごまかすように俺は次の話題に移った。

「木乃香の件だが、俺は教えるだけ教えた方がいいと思うぞ。ある程度の年齢になってから本格的に学ぶかどうかは決めさせればいいだろう。あの魔力量だおそらく一生無関係ではいられんだろうよ」

「……やはり、そう思いますか。私としては、普通の子と変わらぬ人生を歩んで欲しいのですが」

そりゃあな、もっと魔力量が少なく凡庸であつたなら、魔力を封印する魔法具で一切もれないようにして裏の一切から関係を断てばできたかもしれないが、極東一、いや世界という枠組みでも見ても有数の魔力量だ。どこから沸いたかも分からない有象無象がよってくるだろう。その時、無知であるのはあまりにも危険すぎる。そのことを詠春に伝えた。まあ、この程度の事は考えているとは思うが、もしかしたら娘が狙われてしまう事をあまり考えたくないのかも知れないな。

「ならば、12歳ほどまでこちらで呪術や護身術などを学ばせ、それ以降は、麻帆良に通わすというのはどうでしょう？ 京都で裏の関係を持つところは、どうしても権力が付いて回ってしまいます。その点、麻帆良なら普通の子と同じように生活できるでしょう」

確かに、あそこは裏の関係もしっかりとしているし、トップは祖

父である近右衛門だ。信頼してまかすことができるだろう。それに、普通の生活を知り、選択肢を増やすこともできるな。

「いいんじゃないか？ その案で、後は嫁さんと相談しろよ」

「そうですね、今回もありがとうございます。おや、ふふふ」

詠春の木乃香を観るときに見せる微笑ましい笑みを浮かべたので、その視線をたどると。

「これは、可愛らしいな」

いつの間にか俺の膝の上で眠っている刹那がいた。本当可愛らしい子だな。

第15話 半妖の子と将来（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしくお願いします。

次回は介入者視点にしようかと思っています。

第16話 介入者と元老院（前書き）

3人目の介入者です。

第16話 介入者と元老院

宝石や貴金属がふんだんに使われ、調度品一つ一つが高級品である。煌びやかな部屋の一室に私はいる。

「ふふふ、ここにいると思ひ出すねえ」

私がこの世界に来て、死後の世界で得た力から馬鹿な万能感と正義感を持っでしまい、MM元老院の屑を殺したあの日をねえ。そんな風に灰色っぽい短髪に切り揃えられている髪をいじり昔を懐かしんでいると、どうやら待ち人が来たようだ。

「おや、これはお待たせしてしまったかな？」

鮮やかに装飾されたドアを潜って来たのは、眼鏡をかけた青年クルト・ゲートルだった。自分が一番親しくなっている原作キャラがまさかクルトになるとは、この世界に来た当初は考えられなかったねえ。

「いや、そんなに待ってないよお」

「そうですか、では、本題のほうに……ネギ君の村ですが、止める事はできませんでした。情報を掴んで頂いたのにすいません」

クルトは、そう言って丁寧にお辞儀をしてた。うーん、やっぱり無理だったかあ。あれだけ大物だと暗殺すると問題がでかくなりすぎるからねえ。もっと小物がネギの村の襲撃した犯人だと思っていたけど、議席の中でもかなりの上位の人間が主犯とは、さすがに手の出しようがなかっただろうねえ。それにしても、前世と含めたら

実年齢はこっちの方が上だが外見が8歳の少女に、成人男性が頭を下げるのは変な絵図らだねえ。

「それなら仕方ないよお。で、今日の依頼は何なんだい？ 暗殺？ 諜報？」

初めて殺した時、この世界がリアルだと否応が無く認識させられたねえ。それから、考えて、考えて、死後の世界で決めたように私は屑なMM元老院を殺す道を選んだねえ。まあ、いまだ罪にも問われず捕まってもいないのは偏にクルトのおかげだからねえ。

「いえ、今回の依頼は、幸弘という人物と交渉していただきたいのですよ」

「あゝ、戦後できたある種アリアドネーより厄介な中立国の総帥だねえ」

十中八九、私以外の介入者だねえ。まあ、行動が不可解だったってのはあるけどねえ。原作介入したがる人間だと紅き翼と必要以上に近づいておらず、非介入なら戦争に参加していること自体おかしいしねえ。とりあえず、どういう思惑があったのかは知らないけど、原作に無い一つの国を作り上げ、その国とトップとして崇められているのは変わりない事実だしねえ。思惑を知るよりも現状の対処の方が大事だからねえ。

「ええ、あの国は異常ですよ。無料で分け隔てなく難民を助けまわっていた幸弘という一人の人物の考え方を元として作り上げられた種族混合国家。帝国、連合共に疲弊していたとはいえ、たった十年と少力で戦力に関して無視できないほどにまで大きくなったのですから」

「……なるほどねえ、ようするにその国の絶対的なトップである幸弘って奴が味方になれば大きな戦力となり、敵にならなければ警戒対象が少なくなるって訳だねえ。でも、クルトの方が交渉ごとに向いているんじゃないのかい？」

私はお世辞にも交渉が上手いとはいえない。上手いのは、貰ったアイテムによる隠密と与えられた才能がある転移魔法と足の速さであり、後はまあ、貰った業物のナイフを持っている程度だねえ。

「私としても、自身で交渉行きたいのですが、そんなことをすれば他のMM元老院のメンバーに感ずかれます。そして、貴方の隠密能力ならば、他のもの達に感づかれないよう対象と交渉ができるでしょう？」

確かに、私のアイテムは攻撃行動を行わない限り、相手に見つかることは無いだろうねえ。でも、交渉相手がこちら隠密をといった瞬間に相手がこちらを攻撃してくればどうなるだろうねえ。転移が得意をとはいってもノータイムで発動できるわけじゃないしねえ。相手の戦闘力しだいでは転移魔法で逃げる事すらできないだろうよお。

うーん、今回の案件は不確定要素が多いねえ。まあ、でも、MM元老院が暗殺されている中、まだ犯人である私がいるのに、絶大な恩のあるクルトの頼みだからねえ。

「いいよお。その依頼受けるよ」

私はそう返事を返し、クルトが知りうる限りの情報を載った資料を渡された。ふむふむ、現在地は日本の京都ねえ。京都は、関西呪術教会の勢力下だから、うかつに捕まりでもしたら終わりだねえ。

戦闘力は不明、容姿はへえ、イケメンというわけでもなく不細工でもない凡庸じゃないかあ。などと、一つ一つの情報を読み取っていた。最後まで読み終わりその場で資料は燃やして破棄した。幼い時は記憶力が良くて助かるねえ。

「では、よろしく願いしますね。美空君」

「はいよお。報告はいつもの通りの方法でするよお」

そう言つて、すぐさま転移をして私はその場から立ち去った。さてはて、頑張りますかあ。

第16話 介入者と元老院（後書き）

原作キャラでもカラーのイラストがないと髪の色が分かりませんね。

はい、原作キャラの憑依です。

介入者が憑依した理由としては、他の介入者に気づかれず原作に自然に介入でき、キーキャラではなく、かつ魔法を学べる環境にあるということを考えたとき春日美空がその条件に当てはまるなと思いい彼女に憑依しました。

読んでいただきありがとうございます。

感想や誤字などの報告を書いていただけるとうれしいです。

今後ともよろしく願います。

第17話 介入者と取引（前書き）

前話の介入者が登場です。作者は、結構近右衛門が好きです。

第17話 介入者と取引

近右衛門から頼みたいことがあるという連絡を受け、用意してくれた前世では入ることなどできなかったであろう京都の高級料亭に足を運んだ。ちなみにこの店は魔法の事を知る経営者が営んでいるそうだ。

そして、2人で会話をしながら食事を進めっていると、近右衛門が本題であろう内容を切り出してきた。

「幸弘殿、ナギの村が襲われたことは知っておるかのう？」

「いや、知らないな……今回の誘いはそれにつてか？」

ナギの村が襲われたね。当たり前といえば当たり前か、戦時中あれだけの数を殺したんだ恨みなど嫌になるほど買っているだろう。俺の治療所でも恨みを持っている奴もいたしな。それにしてもナギの村が襲われたとして俺に何の関係があるんだ？ ナギとは、友人の友人であり、俺にとっては知人という程度の関係だ。その故郷が襲われたと聞いてもそれは残念だったなくらいにしか感じないのだが。

「実はのう。その村人が悪魔によって石化されてもうたのじゃ。そこでの幸弘殿にそれを治して欲しいのじゃ」

「……なるほど、ただの石化じゃないんだな。襲われたって話から考えるに悪魔の固有能力の石化ってところか？」

ただの石化なら、俺の薬を使えば治す事が可能だ。依頼してくる

ということは俺が直接治しにいかないといけないレベルだと考えるべきだろう。

「ふおふおふお、概ねは幸弘殿の言うとおりじゃよ。ただし黒幕が厄介での、表向きはナギに恨みを持った人間の仕業となっておるが、実際はMM元老院の一部の派閥なのじゃよ」

「そりゃまた、やっかいだな……近右衛門の依頼だから受けてもいいかと思っていたがさすがに今はアスナがいるからな。元老院が関わっているなら受けられないな」

俺の返答を予想していたのか、特に表情の変化も無く、長い髭を手で梳気ながら言葉を返してきた。

「別に構わんよ。向こうで魔法学校の校長をしている友人からの頼みでの、義理を通すために幸弘殿に依頼したのじゃよ。それにのう、何か理由をつけんと京都まで戻ってこれん立場じゃ。本当に孫の顔ぐらい好きに見に行きたいもんじゃのう」

そういつて、老人特有の笑い声を上げた。まあ、関東魔法協会の会長がこっちに来るには相応の理由付けがいるだろうな。詠春も相당한親馬鹿だが、近右衛門も同等の孫馬鹿だからな。少しでも孫の顔が見たいのだろう。

「そうか……で、いつまでこそこそ隠れているんだ？」

俺の言葉の意味を理解した瞬間、近右衛門は戦闘状態に入った。俺は、すでに術式を発動させ、聞き耳を立てていた人間をこの部屋に閉じ込めた。この結界内では、俺が指定した人間以外は転移魔法などの移動系の魔法や大規模な魔法は発動できない。そして、姿を

現したのは、短髪のアスナや刹那と同じ年程度の少女だった。

「ふふふ、まさかばれるとは思いませんでしたねえ。どうして分かったですかあ？」

スポーツ少女のような外見とは裏腹に特徴的なイントネーションではなす少女。確かに相手からすれば気づけたのは不思議だろう、現に最高位の魔法使いである近右衛門も察知できていないしな。

それにしても、本当にすごいな気配での感知や気や魔法による探查術には一切反応しないのは驚いた。俺が気付く事ができたのも孤独な黒子などの感知を妨害する物の対策用に用意した魔法のおかげだ。

「企業秘密だ。で、さっきも聞いたが何が目的だ？　俺か？　近右衛門か？　それとも俺の連れか？」

「うん、よかったよお。いきなり戦闘になっていたら私なんて瞬殺されてしまったからねえ。目的は幸弘さん貴方ですよお」

確かに気の量は少なく、魔力は平均よりもかなり多いが脅威になるほどでもない。体捌きを見る限りこちら圧倒するほどの体術もないだろう……しかし、特殊技能があるかもしれないから油断はできないな。そう思い、体に刻んである術式を発動して、相手に気付かれないように簡易な捕縛魔法をかけ、念のため周りに相手の動きに反応して発動する強力な捕縛魔法を待機させておく。

「ふむ、それはワシが聞いてもいいのかのう？　魔法生徒の美空君」

どうやら目の前の少女は、近右衛門の下についている存在のよう

だ。ということは、バックにいるのはメガロかな？

「ええ、いいですよ。御2人の会話を聞いているとどうやら、かなり深い仲のようですからねえ。別に聞かれて困るような内容ではありませんからねえ。では、種族混同国家クーラの総帥である幸弘さんをお願いがありました、内容はいたって簡単、クルトという人物と敵対しないで貰いたいですよ。勿論タダでは言いませんよ。できる範囲で貴方のお願いを聞きますよ」

え？ 何を言っているんだ？ 俺が国家の総帥なんてもんのはずないじゃないか……あ、もしかして、いや、あいつ等か。ちよつと待てなんで都市とかいつてたのに国を作ってしかも人を勝手にトツプに立ててんだよ！ しかし、ある種の降って沸いた幸運でもある。

しかも、確かクルトって奴は紅き翼にいた奴だよな。そいつが俺にこんな内容の取引を持ち込んでくるということは俺やその友人に危害を加えるということはないだろう。なら、元々何もするつもりがなかったんだ。こちらの要求を叶えて貰えるだけ叶えて貰うか。そう、結論付けたとき、横にいる近右衛門が、アイコンタクトで聞きたいことがと伝えてきたので、俺は結論を言うのを少し待った。

「美空君、クルトという人物は、あの村の襲撃に関わっているのかのう？」

「あの村というのが英雄の村の事だったらNOですねえ。むしろ止める側でしたねえ」

「ふむ、そうかのう。では、もう1つ……君は嘘を言っていないかのう？」

突如、近右衛門から溢れ出す威圧感、常人、いやある程度の熟練者でも気絶してもおかしくないほどの戦闘経験に裏づけされた芯を揺さぶられるような圧力を感じた。さすがに飄々とした態度をしていた美空と呼ばれた少女もこれはつらいのだろう汗を噴出し、瞳孔が大きく開いていた。

「う、嘘は、な、ない、よお」

途切れ途切れの言葉を言い切ると同時に近右衛門から威圧感が消えた。いや、横にいた俺もかなり驚いたのだが、若い頃より強くなっていないか？

「ふおふおふお、ならいいのじゃよ。幸弘殿ワシが聞きたいことはもうないのう」

「そうか、なら、俺からの要求は、真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンの懸賞金の解除と、まあ、後は将来もしも魔法世界に行く機会があったときに頼みごとを聞いてもらうって事でいいか？」

正直、望みはといわれても、衣食住には困ってないし、金もほどほどにあり、友人もいる。この上何を望めと？ いや、彼女とか欲しいなあとは思うけど、別に無理に作りたいほどではないしな。

それに、紅き翼を袂に分けたこととか要求の内容そして、近右衛門の反応から見るにクルトはメガロの権力者だろう。なら、権力を使ってしかできない事を頼むべきだろう。

「……マジですかあ。欲がないですねえ。正直クーラという国のせいで真祖の吸血鬼を明確に批判しているのは現在メガロぐらいですからねえ。適当に理由をでっち上げればできると思いますよお。ち

なみに、別に分からねければいいんですけど、介入者って言葉に心当たりありますかあ？」

「え、もしかして、君も介入者なのか！」

まさか、こんな所で出会うとは、これで出会ったのは2人目か、今回の奴はこっちを殺す！ とかじゃなくて良かった。

「ええ、まあ、憑依のほうですけどねえ。何か目的とかってありますかあ？」

憑依って事は原作に登場していたキャラなのかな？ 原作の知識を消した俺には関係ないことだけだな。

「うん？ まあ、第2の人生だし平穏に暮らすことかな。君の方は？」

俺の返答を聞くと、美空は、驚いた表情を浮かべたと思ったら、何か納得したような表情を浮かべた。

「いやあ、やっと腑に落ちましたよお。私は、より良い未来を作るためですかねえ。まあ、自己満足ですよお。では、その用件のほうを伝えておきますねえ。学園長、今日の事は内密にしてくださいませんかねえ？」

「うむ、構わんよ。美空君の実力も分かったことだしう。仕事をしっかりこなしてくれば構わんよ」

「ありがとうございますう。では、このあたりで失礼しますよお。懸賞金が消えたかどうかは学園長から聞いてくださいねえ」

そう言って、懷に仕舞っていた孤独の黒子に似たアーティファクトであろう眼鏡をかけてその場から消えようとした瞬間、設置していた捕縛魔法が発動して、あらゆる力を押さえ込み、四肢を鎖で縛り上げ、瞬く間に芋虫となった。

「……すまん。解除し忘れていた」

目隠しをされ、言葉を封じられた少女を前にして俺から出た言葉をこれだった。本当にすまん。

第17話 介入者と取引（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

一応作中の解説をしておきます。

美空が敬語なのは、相手が自分よりも年上ということと交渉の場だからです。

美空が持っていたアーティファクトは、孤独な黒子の強化版で、気配を完全に消し、どんな魔法や気の探知にも反応しないというものです。欠点は原作と一緒に攻撃をした瞬間解けてしまうことと、実際にはそこにいるので攻撃は普通に食らいます。

ちなみに主人公の感知の方法は、魔法的ではなく科学的に電磁波の反射は波長の変化によって感知したと思ってください。

感想や誤字報告を頂けるととてもうれしいです。

今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3786w/>

10名の介入者内1人主人公

2011年11月15日08時05分発行